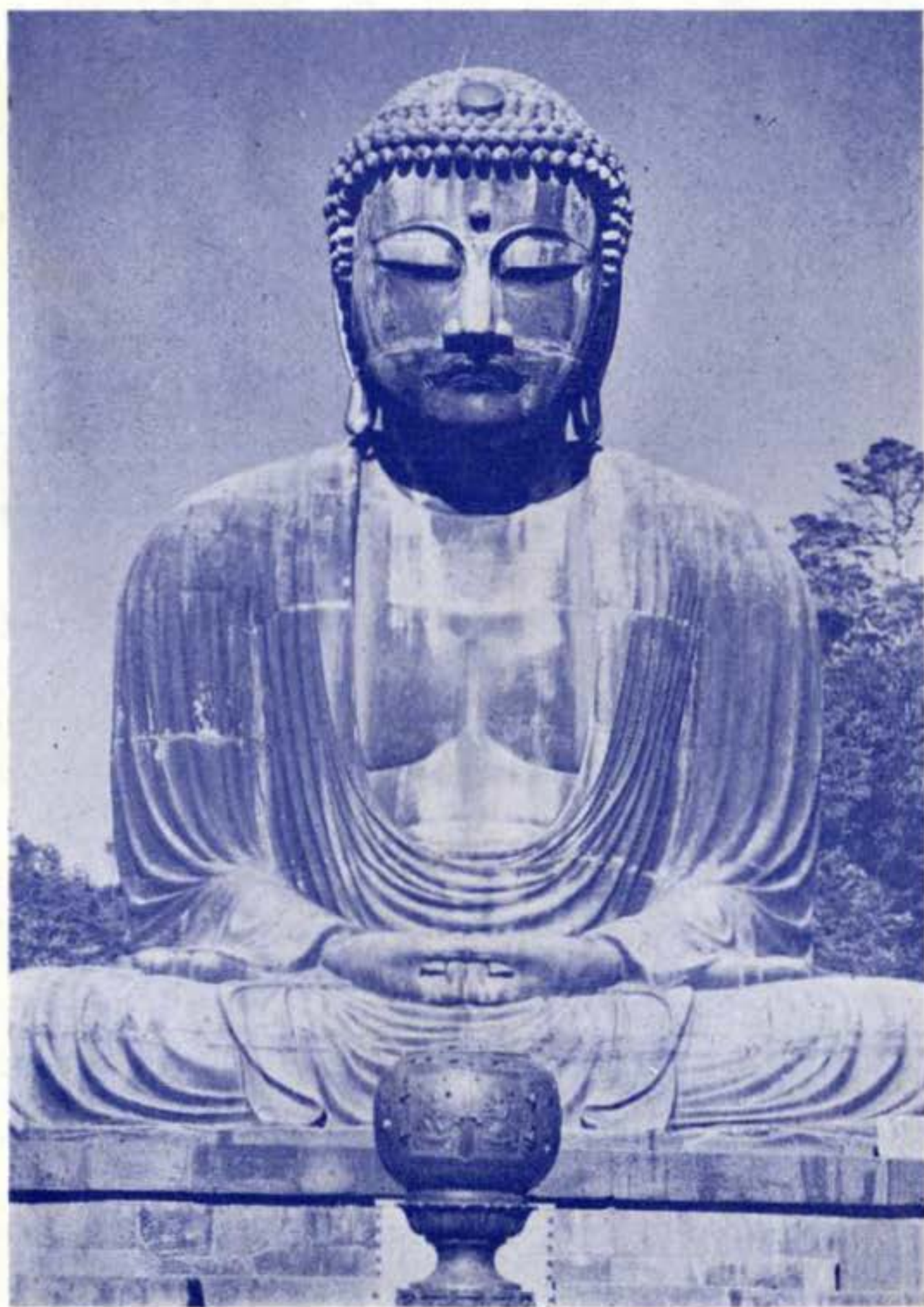


浄土

八月号



法然上人鑽仰会

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)
昭和二十四年四月二十八日 運輸省(特別取扱承認雜誌第三五二号)
昭和三十六年七月二十五日 印刷 昭和三十六年八月一日発行

第二十七卷

第七号

最新刊 浄土トラクト

村瀬秀雄著

月影抄

——御法語の栞り——

本誌「扉の御法語」として毎月執筆中のなかから著者が七篇を選んで解説を付して新らたに浄土トラクトの一編として刊行

目次

- 一、上人のご日常（われ聖教を見ざる日なし）
- 二、浄土宗の意義（われ浄土宗をたつる心は）
- 三、道を求む（かくの如くして昨日もいたづらに暮れぬ）
- 四、決定の信（我は烏帽子もきぬ法然房也）
- 五、弥陀名号の功德（無礙光とは）
- 六、信仰のすがた（つみは十惡五逆のものも）
- 七、念仏を勧める（不怪大士の杖木瓦石を）
- 八、あとがき

B 6 版	十六頁
定価	十五円
送料	十円
二十部以上五分引	
五十部以上一割引	
百部以上二・五割引	

東京都千代田区飯田町二ノ八

申込先 法然上人讃仰会

振替東京八二一八七番

浄土の会員を一人でも多く

◆どなたでも会員になれます。

◆会費は年額六〇〇円です。

◆会員には毎月浄土を配布します。

◆この会は皆様の会ですからその発展の為に

お一人でも多くの会員をつくって、正しい

信仰運動をひろめましょう。

お知合の方にぜひおすすめて下さい。

◆お申込は振替（東京八二一八七番）を御利用下さい。

東京都千代田区飯田町二の八

法然上人讃仰会



駱駝を索く童子

中央アジア・コートンで
発見の絵画断片（紙本）

浄土 八月号

わが身のよきままには、ゆゆし
き念仏者にてある物かな。たれだ
れにもすぐれたりと思う也。この
事をばよくよく意えてつつしむべ
き也。

法然上人御法語

浄土 八月号 目次

表紙……鎌倉大仏

人生の真実……………中山義秀…(二)

身を捨てての信念……………正力松太郎…(一八)

中国綺談 心不可得……………牧尾良海…(二六)

座談会 寺院と布教……………(八)

水子と念仏……………椎尾辨匡…(三)

近代高僧伝 梶 宝順……………大橋俊雄…(三〇)

童話王子のゆめ……………水口正宏…(三四)

真冬の幽霊……………三升家小勝…(三三)

実話 割腹の前後……………吉野翠幹…(三六)

遠くの方から……………(二五) 表紙の写真……………(五)

愚者の杖……………(二五) 扉の御法語……………(七)

危ない愛欲……………(三四) 会員だより……………(三五)

反省と勤労と煩惱……………(三三)

聖典 講義 やすらげき旅路……………竹中信常…(三六)

あとがき……………(四一)



人生の眞実

中山 義 秀

富士山に登ったのは三十一年前のことで、当時はバス等という騒々しいものはなく、女馬子の鈴の音にゆられながら、二合目か三合目まで行った。またその頃は御師の宿が多く如何にも行者の宿らしく、暗い感じであった。ところがその時分から運が悪くなって、子供を三人亡くし、家内を亡くし、父も引続いて亡くなった。それまでは会社に勤めていたものの、我儘なためにボーナスは誰よりも安いし月給は上らなかった。三十にして志を立つという言葉があるので、自分の好きな道をやろうと思いたち、初めて文学に自分の人生をかけることとなった。

自分の好きなことをやれば、一番楽だろうと思ったけれど、自分の好きなことで、この世に生きてゆく程難しいことはない。私は中学時代に級長を勤めていたが、一年生のときに停学に処せられた。その時、私はなんで停学になる

のかかわらない、つまり同級生の犠牲の代表だったわけだ。それ以来私は官立とか官僚という言葉が大嫌いになった。今から思えば、不良になったわけで、親の反対を押しきって早稲田の文科に入ってしまった。そこへ来て横光利一を知った。

横光利一は、私より二つ年上で、やはり文学を一生やろうと決心していた。下宿は私と一緒にあったが、いつも学校には行かない。夜二時、三時になると、私どもは酒に酔って帰ってくる。いつでも横光の部屋にだけは灯火がついている。いつ売れるか知れない原稿を必死になって書いていたものである。

私は文学などは一番楽だろうと思ってやったわけで、これでどうしようというわけではなかった。しかし横光は、こういっていた。

「私は文学をやるために親兄弟に反対された。また三文文士と、世間から悪口いわれているが、それだけやり甲斐があるではないか、誰も味方になってくれない。誰も背景になってくれない。けれども我々は感情を支配する王者になろう」

文学というものは、形がないが、人間の感情に入ることができる。

「我々は感情の王者になろうではないか。人間として立派ではないか。さすがに二葉亭は、文学は一生の業にあらずといったけれども、俺はそうは思わない」

彼は一生けん命であつたのだろうが、私はその時わからなかった。芝居をみたり、女性に氣をとられたり、若い者として当り前のことを行っていた。

ところが人の夫となり、父親となり、それから子供に死なれ、妻に死なれ、父に死なれ、初めて人間一通りの経験をつんだ時に、これからは自分はどうすべきか、こう考えたのが三十六歳、つまり二度とかえらぬ自分の一生を何ものかにかけてしようとしたのであつた。それに横光利一を知らなかったならば、私は文学に人生をかけたかどうかかわからない。

才能というけれど、当人にはわからない。そして世の中

の事は自分の思う通りになるものとて一つもない。「神の意志なくては、髪の毛一筋も地には落ちない」といわれる通りである。若い時には、全世界が自分の思うようになると考え、それが若者の特権でもあるけれど、さて百円の金を借りようとしても容易に借してはくれない。まして自分の欲望とか理想とか、なんかやろうとする時には、ただでは手に入らない。私もすでに四十に近い子供を持っているが、人生というものは、東京駅から列車にのって九州に着くようなものでない。やはり富士山を一步一步登るようなものである。

何事も経験であると老人がいつても、これから人生を始める人にとっては、遂に未来は不可解であらうし、新しいものであるし、自分から開拓し、今ニューフロンティアなどという言葉が流行っているが、何を開拓してゆくのか、その目標があればまだよい方で、将来は實際闇黒といわねばならない。自分の力をこれだけ費したからこうなるというものではない。

小説家の中には、健康な家庭や幸せな身の上として育った者が少ない。片親、あるいは妾の子供、また両親をなくす等、つまり不幸というものが人間の精神に作用して、人の感じられない何ものかを出す。

大宰治がいった通り、真珠貝というものは、母貝の病気である。傷をつけてできるといったが、芸術の花を咲かすとか、文学の花を咲かすというのは、何れは心に傷のある人間が誰にもいえない、誰にも訴えられない、こういうものが結晶して花を咲かせたのである。

×

筑後の国、福岡県柳川という所に、十二万石橋宗重という人がいた。戦国時代には有名な武将であつたが、関ヶ原で豊臣方に味方し、そのため柳川十二万石を没収された。昔は軍役というものがあつて、百石につき一人、つまり昔は馬上武者といい、槍一筋、馬一頭、家来が十人ついていた。それを一騎といった。だから二万石では二百騎、そうすると二千ばかりの人数になるが、その家中で一番いい侍を皆ほしがる。加藤清正は、土木の大家であり、優れた人であるから橋宗重にはいいものがあるというので小野和泉という人を初め五十人ほどを高級な月給でかかえた。ところが戦場を往来し、命をまともに戦った人々からみると、加藤家に対して何んの手柄もたてていない小野和泉が、五千石の領地をもらったというので、埴才蔵等の有名のものまでがブツブツ不平をいった。

ある時、小野和泉は、皆の集った所で、自分の着物を脱

いで裸になった。そして十六歳から戦場にて刀、鉄砲、槍、弓等で受けた傷、四十四カ所の傷の一つ一つについて説明を行った。与三郎は三十四カ所の刀傷というが、小野和泉の場合は、傷一カ所が一つの財産になった当時としては、四十四カ所の傷を受けているのに五千石では安かろうというものであつた。加藤肥後守五万人の家中の中の上級の侍ばかり二百人が集っていたのだが、誰一口をきくものがなかった。

だが戦国時代といっても、戦場に行ったものだけの人生ではない、身体の傷は見えるけれども、心の傷は誰にも見えない。傷を受けるのは何も戦場ばかりと限ったものでない。我々の日常でも多くの傷を受ける筈である。その傷がたとえどのような傷であるにしても、それについて何かを語る資格があるとすれば、それは作家ではあるまいか。

金持や貧しい人、または高位高官やその日ぐらしの人等と一緒に酒を飲む事があつても、我々にとって、そのような世の中のことはあまり問題にならない。問題になるのはその人の心に曇りはなにか、自分の心をごま化してないか、そういう気持である。世の中に生きてゆくのに、正直や清潔ばかりではゆけずに、皆傷を受けるけれども傷をいかに受けても心の正直な人、美しい人には、第一に帽子を

脱ぎたい。

人生の真実とは何ぞや、といってもその真実を知っている者はいない。生きて見なければわからない。生きてゆくのも自分の行いと自分の血を以て買わねばならない。人生というものは五十万年も続いているので、我ここに生きたという感じを受けるには、やはり自分の汗と血を以て買わなければ、人生の何んたるかがわかる筈がない。決して努力や肚や口先きだけで人生は買えない。少なくとも人生の本当の真価を買うことができない。

表紙の写真

頼朝に仕えた稲多野局が元仁元年(一二二四)に工を起し、暦仁元年(一二三八)に周八丈の木造大仏を建立。寛元元年(一二二四三)に大仏奉安の伽藍を竣工。ところが宝治二年(一二四八)の秋大風で倒壊し、再び稲多野局の努力によって金銅の大仏と大仏殿を建長四年(一二五二)に完成。大仏殿の方は建武二年(一一三三)に有名である。一時荒廃したもの、明応四年(一四九五)の三回にわ

たり倒壊し、その後は露仏として現在に至った。今見る大仏殿礎石によって当時の規模の大き

かったことを知る。大仏の原型

作製者は不明であるが、鑄工は丹治久友、大野五郎右衛門の二人で、青銅の部分寄せ集め、

表面をやすりで削ったものである。

当初は黄金色で、今もほ

の一部に金が残っている。また

ギリシャ、印度、日本の造像の

特色を調和融合されている点で

を復旧したのは祐天上人である

私は我ままで親に苦勞をかけ、それだけ蹟く事が多かったわけで、その度に心の傷を受けた。たとえば狼が富士の裾野を馳け廻って、自分の勝手放題をしようとして、当然の天罰を受けたようなもので、そのかわりそんな世の獣でなければ、わからない悲しみや、誰も聞いてくれぬ訴えや他からかくれて自分の傷をなめながら月の美しさ夜の深さを感じ、自分の孤独であること、そして時代はいかに実ってゆこうとも自分の人生は自分の人生だけであり、何んという貧しい人生だったかと、こうした良心の反省を感じる。これが実業家、政治家、その他忙しい仕事の人なら、そうは考えないかも知れないが、私どもは自分の時間だけは自由になるところから感じ得るのである。

私の経験の中で一番恐ろしいのは、やはり生活難であった。団体で百万の敵に向うのは易しいかも知れないが、妻子をどうして養うのかと考えること程恐ろしいことはなかった。室生犀星は壁に向って三年いたという。つまりいつ自分に運が向いてくるか、何時自分の原稿を買いにくるかを考えていた。試験が通ったらずくにゆけるようなものであり、いかに自分が努力しても直ぐには報いられるような人生ならばやさしい。いかに努力しても報いられない、そこに人生の深さがある。

それでは人生は不公平かというのに、私の六十二年の経験からいえば、人生は決して不幸ではない。眼前のことは公平不公平があるが、長い時を経過してみると、やはり神の秤は公平なのではないか。私は信者ではなし、声なき声ではないが、人生の、人間の生きている社会の奥には、正しいものがあるような気がする。

現在の私は、私の残った僅かな人生を、できるだけ静かに、できるだけ汚れない、そしてこの世に生れてきてよかったと思いたい。私は誰に対しても、そう悪いことをしなかったと思いたい。若い時は我武者羅であり、やりたい事はやっていいけれども、人生には勘定書があつて、いつか必ずその払いをしなければならぬ。これは間違いのないことである。

小野蘭山という今から二百三四十十年前の人があつた。彼は「本草綱目綱要」という六十巻の大著書を残した。彼が七十歳の時に、たまたま比叡山で植物の採集をしたところへ京都町奉行から召し抱えたいといつてきた。ところが小野蘭山は逆って迷惑な顔をした。孤独と社会との関係は、人間対人間の関係から大変難しい。若し誰かが自分独りで生きていたとする。その場合は植物なり小鳥なり草花なり何んでも結構だが、耐えられなくなった時には、自分の独

りの世界に閉じこもるしか方法がないのではないか。結局自分の生活は自分で何んとか苦勞してでも片付けないことには、或いは自殺したり、いろいろの摩さつを越したりすることとなるので、自分の生活を大事にするという事が根本ではあるまいか。

そこで小野蘭山は、幕府に入り、薬草園を預っていたのであるが、ある大名に呼ばれた時に座に、つくとすぐ、床の間の置物を指して、「これは九州の太宰の梅でございましょう」といった。大名は驚いて、どうしてそれがわかるかと問うたところ、彼は若い頃に太宰に行つて梅の伐られるところを見たことがあつて、その時に木目、その他すべての点を調べておいた。同じ梅であっても、その土地の氣候や風土の関係で、ある種の特色を現わしてくるので、彼は床の間の木を一目みてすぐ当てたわけであつた。

彼はそれほどの大家であつた。彼の晩年のある日のこと湯に入つたときに、何時まで経つても音一つしないので、年寄だからもしや湯でのぼせているのではないかと、家人がみに行くと、「湯が熱いから、冷めるのを待っているのだ」と答えた。たった独りの自分の世界に住んでいる人の姿が、ここにあるわけである。自分独りの生活を大事にしろということが即ち文学の教えでもある。(文責在記者)

扉の御法語

げにげにしく念仏を行じて、げにげにし
き人になりぬれば、よろづの人を見るに、
みなわが心にはおとりたり、あさましくわ
ろければ、わが身のよきままには、ゆゆし
き念仏者にてある物かな、たれだれにもす
ぐれたりと思う也。この事をばよくよく意
（こころ）えてつつしむべき也。（念仏行
者訓条）

うになり、同時に他人がすべて劣って見える驕慢の心をおこすべからず」と断固申されて
からであります。これは信仰の深さ、真剣さ
といはほど遠い空虚なものであります。即ち自
分を偉い者とか、勝れた者とか思うようでは
念仏者ではなくなっているわけであります。

誰でも、常に反省し、懺悔し、そして真の
己が姿をみきわめて、救いを求めるところに
信仰が生れます。僅かばかりの智恵や、持戒
や、慈悲があつても、ほんとに反省してみる
と何んの役にも立たないことを知ります。こ
こに初めてお念仏が口をついて申されるので
あります。もし自分におごりたかぶる気持が
あつたなら、いかにお念仏を申しても、それ
は空のものになるでしょう。

「げにげにし」とは、如何にも尤もらしい
ということです。内容より外見を尊ぶ人が、
形をととのえて尤もらしくお念仏を申し、と

他人が愚劣に見えるのは、自分に慢の心が
あるからです。ところがお念仏に障りとなる
慢、つまり「うぬぼれ」という悪魔は、実は

七慢とは、自分より劣っている者、同等の
もの、自分より勝れている者等に対して、常
に自分の方が勝れていると思う三種類と、我
慢、増上慢、卑劣慢、邪慢の四つがあります

りすました人は、まゝ自分だけが勝れて見え
て、すべての人が劣ってみえてきます。誰々
は愚劣だとか、大したことはないと思うよ
うになります。「あさましく」は、驚くばか
りにひどいという意味です。「ゆゆしく」は
大層勝れていることです。

他人が愚劣に見えるのは、自分に慢の心が
あるからです。ところがお念仏に障りとなる
慢、つまり「うぬぼれ」という悪魔は、実は
容易ならざる人間の弱点について、上人の「
はあります。この点からお念仏を申すこ
とは、一枚起請文の「智者のふるまひをせず

上人のこのご注意は、外見だけを整え、尤
もらしい人になってはいけぬということです
が、そのわけは自分独り大層立派だと思ふよ

また上人は、他のご法語で、「返す返すも
して只一向に念仏すべし」であります。



青年学徒にきく

「寺院と布教」座談会

司会 本日は

新進学徒の先生たちのお集りを得て、仏教の実態から将来への指針をお示し願いたく、この計画を持ったのであります。先生方は現に正大学生の指導に日夜お骨折り下

さっていますが、当然近い将来に仏教界を担われ中心的指導の役割を果される方々ばかりであります。従って将来あるべき仏教の姿については、それぞれの立場からすでお考えのことと存じます。塩入、宮林、

斎藤三先生には、天台、浄土、豊山派の住職という立場から、また石上先生は寺院外に暮している点から、佐藤先生は寺院にいても住職候補者という点から本日おいでを願いました。しかし特にそれらの立場を強調していただくつもりはありません。

さて座談会の題目は「寺院と布教」であります。が、仏教の中心道場は寺院であり、寺院の機能は布教にあるわけで、仏教の最も具体的実態を語り、未来への指針とすることにはほかなりません。未来図を描く

には現代への批判から出発すべきですからまず初めに寺院に対する現代人の関心という点からとり上げていただきたいと存じます。ただし老人と青年と分けてお考え下さって結構です。塩入先生から一つ。

寺院の種々相

塩入 寺の種々相といいますが、第一には浅草寺のような寺があり、ここは宗派を超えた在家中心の信仰道場、いうならば不特定多数の信者を持っています。あの多数の参詣者に対して、寺としてどうすべきか、仏像を拝ませる、価値あるものを拝観させる広い場所を公共に提供する、福祉事業を行う等いろいろあります。しかし寺は仏教を伝える所ですから、いかに不特定多数の参

拝者であっても、何んらかの形で布教することが不可欠であると、寺では方法を考えています。第二には法隆寺のように、歴史的、重要文化財の寺で、拝観に人が集まる所です。ここでは毎年夏期大学が開かれ、重要文化財ブームにのって、歴史的に有名な仏像仏具の前に多数の青年が集まります。以前私も参加して、佐伯管長がその期間中欠かさず出席されたことに感心しました。若い者（主として学生）は仏間に入るとキョロキョロして美術的なものを観る形でしたが、老観下は仏像の前に来る度に必ず礼拝されました。第三には、一般の寺院で、モダンに運営されています。

宮林 かつて京都法然院にお詣りした時、普通の寺にはない内陣に椿の花が散っているのを感じしながら出てきたら、廊下のところで「あなたは何をしに来たのです。見物ならお断りします」と頭から叱られました。佐藤 私のところ、鎌倉の大仏殿に詣る人で人生の上り坂といった青年たちは関心が薄く、大仏さまの前で拝む人は五十すぎの人です。遠足の人たちは写真をとるのが目的

という次第で、中には仏体の上に昇る者がいます。今度重要文化財保護委員会の手で、大仏さまを一段高くしてもらい、仏体に上らぬよう禁札を出しました。特に日教組の影響の学校は全く困ります。道場たる寺に入った以上は、単なる美術品鑑賞ではありません。学校の宗教々育の大切なことを痛感します。

円覚寺で今年夏期講習会が開かれ、二週間にわたり早朝の座禅から終日の修行に熱心です。外交官、政治家、資本家、芸能人など種々ですが案外若い人が多数います。寺は文化的になるよう努力するより、弱気を捨て一本打ち出してゆく所にかえって若い人の関心と呼ぶようです。それと同時に寺は社会福祉事業等を国家や委員にまかせず、昔のように努力し、大衆と結びつくことが大切だと思います。

若い人の関心

石上 若い人に関心を持たせるには、仏教美術をとりあげ、その後に秘められたものとして仏教を教える。ただし仏教術語を用い

語る人 (五十音順)

大正大学講師	石上 善応
同 助手	佐藤 行信
同 講師	(宗教学専攻、浄土宗)
同 講師	斎藤 光純
同 講師	(西藏学専攻、豊山派)
同 講師	塩入 亮達
同 講師	(天台学専攻、天台宗)
同 講師	宮林 昭彦
同 講師	(仏教学専攻、浄土宗)
司会	村瀬 秀雄
編集部	水谷 哲雄
同	佐藤 成順

たら逃げられます。用語を用いないですむ方法には美術が一番です。仏教の話をするにはどこにも場所があるわけで、修養という目的で、若い人が寺にゆくには、また別な関心を持たせなくてはなりません。

塩入 仏教の行、それも儀式的な大きなもの

でなしに、宗教的なものに入る簡単な行、自分で実践できるものが欲しいものです。いきなり教理を説く布教は失敗します。私は中学時代に親からの命令で、嫌々ながら大倉精神文化研究所の夏期講習に参加しました。四時に起床、水をかぶってから屋上で日の出を拝むのです。一行一菜で日中は泥運び等の仕事です。これを終って、参加してよかったと感じました。善光寺の階段廻りも同様でしょう。ご本尊を拝むばかりでなしに、自分の足で歩いてきたという点がよく、また魅力です。話だけならテレビで家庭で聞けます。足を運んだかいがあったという点が大切なのです。

斎藤 寺に対

する関心が

若い人にな

いわけであ

りません。

これは家の

裏の問題で

親自身が実行している家の青年は、寺に入ってきます。そこで大きな寺では、計画的



塩入 亮逸氏

に統一的に入信するよう行事や布教を行い小寺ではその後の個々人に対して引き受ける。また住職にしても得手不得手によってお互に協力して人を引きつけてゆく。



斎藤 光純氏

宮林 宗教的裏

も大切ですがやはり人格のふれ合う場をつくるべきです。小寺というが、大部分

が小寺なので、経費をかけずに人を引きつける方法に苦心があるわけです。

佐藤 必ず人が集まるように、毎月毎週講習会等を催すとか、パンフレットを配布するとかすればよいでしょう。

寺の再出発

宮林 農地解放等によって、いたる所の寺が貧しくなった。そこで役場とか学校等に勤務するわけで、一般人と同じ勤めをして、住職だからといって特別に活動しろということが無理になってきました。この辺に根

本の問題がありはしませんか。

石上 北海道は道庁令によって最初から寺が墓地を持つことを禁止していました。開教師は、開拓者と一緒に暮し、檀家との接触を月並で保ったのです。座り込んで話をするとまた特別な関係を生じてくるのです。その内に寺でも毎月何回も会合を催し、また借金をして保育園をたてました。これらが縁で檀家が寺に来るようになりました。要するに最初から背水の陣をはる意気込みだったわけです。

佐藤 住職が勤め人であってよいと思います。ただ同じ仲間にあって「さすが僧侶である」といわれるように、少しでもよいから他と違ったところがあれば立派だと思います。寺がなくなったら仏教がなくなるので何んとか寺を護持することは大切なことです。

寺門の興隆

塩入 住職が宗教活動に熱心であり、努力をおします、実践力があるならば、その住職に対して宗団が十分援助すべきです。キリスト教が山間辺地に伝道できるのも、単に

人の問題でなく宗団の問題です。仏教にはそれが無いどころか、宗門は分裂し、寺院は独立して各個ばらばらであります。宗門に対して期待が持てないとか、課金をのがれて自分勝手になるのだといっても、寺は単独で活動できるものでありません。本寺大寺、小寺の区別があれば、それぞれが協力し、多人数の力で仏教興隆を図らねば効果がありません。

宮林 富山県出身の友人が東京で住職し、月並を行って檀信徒を三倍にふやした実例を知っています。ところが友人が亡くなり、その寺はもとの小寺になりました。

塩入 埼玉県の老僧がいますが、この人は無住の寺、経済力のない寺



佐藤 行信氏

を探し廻っています。学問はないが、信念と実践力でゆく人です。檀信徒との接触には実に積極的で、不幸に見舞われた家とか

困っている家とか聞くと、自分で出掛けて行って相談にのります。近頃は団地に対してこちらから開拓していきます。



石上 善応氏

宮林 新興宗教の布教師が、病院の前に立っていて信者を掴み、患者を尾行した話

はただイヤラシイだけですみません、彼は彼なりに努力し、苦勞した点をかうべきでしょう。ある詩に、お寺にゆくとステレオで、茶の間でテレビで大笑い、帰りは女中に見送られ、というのがありますが、せつ角寺に来た人をこうして逃がしているのと比較べて、新興宗教の熱の入れ方は、学ばねばなりません。

佐藤 ある寺で保育園をつくったところ、檀家の出入が増し、寺が復興しました。

婦人への布教

塩入 お茶、お華の会で婦人を集めたところこの婦人たちが、寺の行事を手伝って、自

然と寺の活動に入り込むことになった。こうした婦人たちが寺のことに参加してもらうことは新しい意味で必要なことです。

斎藤 部落の婦人、つまり他の土地からお嫁にきた人たちですが、寺からあるお念仏と称する講に必要なお経の解説をたのまれて毎日曜に行ったことがあります。ところが部落の大部分の婦人が参加したので、こちらで驚いてしまいました。

佐藤 お嫁にゆくという点から婦人は大切です。婦人の宗教的関心は、他の地方に持ち込まれてゆくことですから。

塩入 大森亮順師が昭和三年に浅草寺に住職された時に、観音経読誦会をつくりました。その時、お経の話をするからというビラを各女学校にばらまきました。最初はほんとの何人かが来て始まったのですが、それから三十四年になって現在も続いています、引続いて来会する婦人もありますが、そうでない人は、お嫁にゆくことになって稲の株がふえるように自然と他の地方にそれが植付けられ株がふえてゆくことになったのです。

中道は半端

石上 寺にゆくのは話をしにゆくので、人事

相談式のこと

が多いと思ひ

ます。その場

合特に仏教々

理によつて説

くこともない

ので、ただ相談相手になることも仏教人の

任務でしょう。

斎藤 寺は蟻の愚痴の捨てどころで、これで

よいと思います。小寺の大事な仕事です。

塩入 仏教は人間救済ですから、人間として

生きがいがあり、生き抜くことを植えつけ

ればよいのです。暴力問題で世間が騒々し

くなった時を考えても、誰も暴力は悪いと

知っていて行っているのですから各人にも

つと自覚を持ってもらうしかありません。

斎藤 暴力問題にしる、平和問題にしる、何

かい出すと、すぐ右とか左とかに見られ

がちです。

佐藤 左でもなく右でもなく、共通の場が是

非とも必要なのですが、仏教が共通の場となるためには、もっと勉強しなければいけませんまい。

宮林 宗教の救済はやすらぎで、個人的問題

を寺に持ってくるのです。暴力とか平和と

かの社会問題、国民運動にしても、宗教は

個人個人の救済である以上、一人が二人と

なり、自然と地域帯ができ上るようにして

ゆくしかありません。

塩入 こうした問題を取り上げるなら、全仏

等の機関を利用して行ふべきで、個人個人

で参加しない方がよいでしょう。

斎藤 安保問題でも何んでも、仏徒という旗

こそあげないが

個人として出掛

けているのでし

よう。価値判断

は個人の問題で

す。

佐藤 しかし世間

では、仏教徒は黙っている、と漠然という

人のあることも事実です。

石上 自分はこうであるという立場を持つこ

とは必要です。何よりいけないのは自信喪失です。

斎藤 持つべき自信の基盤は何んでしよう。

宮林 仏教は中道ですが、どうも中道という

と中途半端にとられて困ります。

石上 中途半端にとられる位なら、触れぬ方

がよいでしょう。

説教の影響

宮林 お説教を聞いて帰る人たちは、布教師

の上手下手、内容のよし悪しをいい合いな

がら、一步山門を出るとともにどつてし

まいます。せつ角説教を聞いたらか実践

的なものを身につけてもらいたいもので、

こんな影響力が説教にあつて欲しいものと

思います。

塩入 天理教の集会には下足番が要らず、便

所がきれいだといわれますが、これが実践

力でしょう。

石上 会員約四十名、平均年齢二十一歳とい

う会があります。初め或る人が若い者に仏

教を教える会として出発し、会の世話は当

番制で、月三回の例会を開きます。ただ年



宮林 昭彦氏



村瀬 秀雄氏

一回（今年で五回目）円覚寺で座禪をくみます。これに参加して帰ると、家の人から以前と違ってきたといわれます。

佐藤 芝中学校（今

の芝学園）の卒業

生は皆仏教に対して好意を持っています。寺院子弟は

各組に一、二人し



佐藤 成順氏

かいなく、特に仏教を教えたわけでもないのですから、学校の宗教教育の重要さがわかります。仏教系の学校は幼稚園から大学まで、いくらでも欲しいものです。

宮林 布教の場はいたる所にあります。しかし本堂に人を集め、何等の準備のない人にいきなり有名布教師の説教を聞かせると、逆に断層のできる可能性があります。

佐藤 外国に仏教を持ってゆくには、美術を通すのがよいように、説教に術語を用いないことです。

石上 新しい表現方法を考えています。さき程申した会合では、術語を一つだけとりあげて話し合います。一つ以上は出さないの

です。

宮林 いろいろの苦心は肝要ですが、さりとて逆に説教を躊躇したのでは、お寺に行つて仏教を聞かずに帰ることになります。

石上 高僧の話はうけますが、人物の話は若い人も喜びます。

斎藤 布教は個人対個人です。月並で檀家の傾向を知り、老人なり若い人なりで同傾向の人を集めることがよい方法です。

塩入 折伏はその方法を用いています。

斎藤 ただ有難いというばかりでなく、教理を知りたい人も多くあります。

石上 お寺は若い人に利用されるようになりたいものです。

斎藤 何より住職が自信を持つことでしょ

う。

石上 話だけでは逃げられま



水谷 哲雄氏

すから、一対一でぶつかる必要があります。やはり信仰は個人のものですから、結局は一対一で解決がありません。

寺院と外国人

塩入 浅草寺に外人がくるけど、信仰心はありません。観光客にすぎないわけで、仏教が世界にのびるためには考えさせられます

佐藤 浜田本悠氏の日本の宗教（英文）を売っています。よく売れます。求めている者に与える必要があります。

塩入 先日埼玉の喜多院にロータリアンが多数来て、市長からも接待方を頼まれましたが、説明なしで護摩をたいたのです。するとその中の一人が仏教の洗礼を受けたいというので、改めて仏前で加持を行いました。占領軍の教育機関にウィリアムソンという人がいて、帰国前に自宅に招いて夕食を共にしました。彼が帰米してからロスアンゼルスで発行しているアメリカの仏教というパンフレットを毎月送ってくれます。もう数年になります。彼が私の名前で前金払込みで購読を契約してくれているのです。

一般に仏教入門の道はいくらでもあるのですが、その後の進歩という点が難しいので

す。

各寺院の協力

齋藤 大寺は同一方式の布教をやり、小寺は個々の布教をやるという受持をかえて考える必要があります。

宮林 個人には限界があるので、各寺院の横の連絡、宗派が違っても地域で一つになり相互に利用し、共同作業をしたいものです。石上 現代に対しては点がからいもので、僧侶自身の反省も必要ですが、宗門は一般に何を与えるべきかの指針を示す必要があります。個々にまかせておいては単なる繰返しに終わります。

齋藤 宗門の指導性ということで、卓見の師を用い、今から用意すべでしょう。

石上 花まつりだけが共同事業では心細い。

齋藤 法要一つにしても大寺と小寺の受持ちが違います。大寺中心の行事もよいが、各宗共同の布教の場がほしいですね。

石上 終戦後の北海道は左派が旺んになり、一方キリスト教の進出がすばらしかった。

そのため仏教界は、この両面から攻撃され

ることになりました。そこで仏教界では毎週一回、必ず大工場のそばで講演会を催しました。このためかえって仏教界は大変な意気込みで復興したのです。そうするとある程度批判された方がよいのかも知れません。

佐藤 清水市に鈴与商店といって、従業員が二千名以上いる会社があります。初めは会社側が友松円諦師を招いて話を聞いたのですが、今では労働組合の方から友松師を招いて毎月講演をお願いしています。

塩入 明治四十三年八月の大洪水の後で、浅草公園に伝道会ができましたが、相手は通りがかりの人で、時にはルンペン風の人椅子にねながら聴いていました。多くの先輩がここで苦勞されたわけで、あれは沢山の功績を残しました。

宮林 友松先生も当時の闘士であったわけですから。布教は言語だけで行うものではありません。いかに美辞麗句をつらねても効果はないと思います。布教を裏づけるには、行動が何より大切です。

塩入 しかも専門的言葉を用いての説教は聞

いてさえくれません。

石上 仏教でなくても、何ごとでも専門語を自由に用いて説明するら易しいことです。が、それは専門家だけにしか通用しないことです。

齋藤 仏教は人生の問題である以上、専門家とか素人とかいう考え方がおかしいのではありませんか。

塩入 ところがその点が一番当り前のことであつて、一番難しいことなのです。

塩入 昔はたしかに僧侶は専門家であつたしそれでよかったのでしょう。しかし現在は僧侶が専門家であつて、素人は黙ってついてくれば、それでよい等という時世ではありません。それなのにこうした努力が甚だたりらいと反省します。

佐藤 仏教が人生の基礎となるべきもののと自覚にたつなら、このよう議論もあるべきでないのですが、すると第一に反省すべきは、実は私たちであつたということになります。よしよ。解りきつたことに、うっかりするのもお恥しいながら現実です。

司会 長時間にわたって有難うございました

遠くの方から

このごろ家に夕刊を配達してくれる小学生が、あるときこんなことを話してくれた。

新聞も一枚だ何ともないが、たばにして肩にかけるとずい分重いものだ。だから、近いところから順々にくばって、遠いところへ行くほど軽くしたほうがいいと思うでしょう。ところが、それがシロウトのアサマシサなんだ。軽くなるけれども、くたびれかたも多くなって、やっとくばってヤレヤレと思ったら、遠いところへ来ちまってるんだ。これから家まで帰るのかと思うと、ガッカリしていやになっちまう。泣きたくなっちまうのさ。

はじめに、遠いところへ来てしまふのは、重たい新聞を一枚もくばらずに行くのだから、何だか損をしてるみたいだけれど、はじめ

は元気があるでしょう。だから割合い平気なんだ。それより、気持ち

ちが重くなつてから歩いて帰る方がツライからね。新聞の重いのもり気分の重い方がイヤだね。

だから思い切つて、はじめに一番遠い家までつづ走るんだ。そして順々に帰つて来る。自分の家に近くなるにつれて、段々軽くなる。そうすると、気分も軽くなつて、かえつておわり頃になると元気が出て来るんだ。いろんなふう

にやってみたけど、これが一番いいね。

人生には時にムダ骨をおることがある。丁度、重い新聞のたばをかかえて、一番遠いところまでかけて行くように。しかし、それが決してムダにならぬところに、人生の妙味がある。荷物の重たいのより気分の重いほうがつらいということは、まさに至言である。

愚者の杖

或る金持ちのところに、一人の召使がいた。その召使は非常に愚か者で、主人もあきれるばかりであつた。ある日、主人はこの召使に一本の杖を与えて

「この杖は、世界中で一番愚か者の持つ杖だ。これをお前にやるから、お前より愚かな者をみつけて、早くこれを渡してやれ。この杖を持っているかぎり、お前は世界一の愚か者だぞ」といいきかせた。

杖を貰つた愚か者は、自分が世界一の馬鹿者になるのは名誉なことではない。なんとかして、この杖をゆすり渡すものはないかと、一生懸命にさがしてみた。ところが、なかなかみつからぬ。

そのうちに、主人が重病にかかり、回復の見込みもなく、いよいよということになって、家人を枕

頭に集めて、お別れの言葉を告げた。そして、愚か者にむかつて

「このたびは、私も再び起つことが出来ず、お前達とも別れて遠いところへ旅立つことになった」というと、愚か者はおどろいて、

「そんなに大変な御旅行ならば旅の御支度もさぞかし充分になさつたことでしょう」「いや、別に何の支度もしておらん。」

これをきくと、愚か者は、自分の部屋から、例の杖を持って来て「この杖を今日おかえし致します。あなたは、自分が旅行に出る

というのに、どこへ行くのかも、いつ帰るのかもわからずに、また支度も何もせずにボンヤリしているなんて、世の中にこれほど馬鹿げた人はいりませんまい。世界一の愚か者の持つ杖は、あなたが持つほかありませんまい」

といって、とうとう、杖をかえし

中国綺談

心不可得

牧尾良海

唐の乾元年間のことである。会稽郡に楊という大金持があつたが、或る時、大病にかかつて重態に陥ち入り、病床で苦痛に呻きながら、今はただ死を待つばかりであつた。

この楊老人には宗素という息子があつたが大層な孝行者で四隣に評判が高かつた。彼は父親の重病に心を痛め、たとえ全財産を蕩尽しても何とか治してやりたいと思つて、あれこれ湯藥名医を探し求めていた。

やがて、陳という名医を探しあてて診断を仰いだ。陳先生は、すっかり診察を終つてから、心臓がいかにしているとの判定を下した。

「この御老人は、財産が余り多いので、やれ利殖、やれ倍増と余りにも心を使いすぎた為心神がすでに身体を離れてしまったのじ

や。この病氣には、生きている心臓を食うのが一番良く効くのだが、たとえ鐘太鼓で歩いてもそんなものは見付からぬから、まあ、助からぬものと思ひなさがよい。」

宗素は、生きている人間の心臓なんて、とても無理なことだと判つていたので、せめて少しでも長く寿命を保たせたいものと思ひ、僧侶を呼んでお経を読んでもらったり、又、仏像を画かせて礼拝供養にも専念し、後には郡中遠近の仏寺へお詣りをして僧侶にお斎を捧げることも怠りなく勤めた。

或る日、例の通り布施物や重詰めを持って出かけて行つたが、どこでどう路をとり間違えたものか、山道へ迷ひこんでしまった。遙か向う下の所に一つの石窟が見えたので、近

寄つて見ると、中に西域僧がいた。顔は老け且つやせており、毛ほろを袈裟の様に肩からかけて、大きな石の上に坐っているのである。宗素は、之は異人に違ひないと思ひ、前へ進み出て拝礼した。

「師父は何処の方でございますか？　こんな人里離れた山の中に独りぼっちでおられ、侍者のお方もおいでにならぬ様であります。野獸が師父に危害を加えるかも知れませぬものを、恐ろしくはございませぬか？　それとも仏道の妙術のおできになる高僧であらるるのでしょうか？」

宗素が尋ねると、その老僧が言つた。

「僕はもと袁氏の出で、遠祖は、巴山におりましたものじゃ。子孫が分れて弋陽にいた者もありますし、皆諸山の谷中に散り住んでおります。僕は祖先の家法を守つて山間に隠居し、詩を低吟しては自ら楽しんでおります。詩人達は僕が詩吟がうまいとて、相当に名を知つていて呉れます。孫という一族も親戚にありますが、この一族の連中は貴族豪門と結んで交遊し、善く諧謔を談じ、演劇も行つて人に利益を与えております。僕はひ

とり仏教を好んで俗塵を避け、心を巖谷の中にすまわせ不動心を養うておりますのじゃ。常に仰ぎ慕うところは、身肉を割いて禽獸に喰わしめたかの育利王や崖下にとんで飢えたる老虎に吾が身肉を与えた釈迦牟尼その人です。儂はここで橡栗を食い、泉水を飲んでおれば足りることで、たとえ虎狼が襲いかかつて儂を喰いつくそうとも、甘んじてこの身をやりますよ。」

「老師は真に至高無上のお方です。よくその身をすてて顧みず、山獸に身を呉れても惜しくないとは、仁勇ともに極まれるお方というべきです。さて、私めの父は重病に悩むこと既に数カ月、浴びるほど藥をやりましてもさらに効き目がなく、何とか方法なきものかと日夜苦しみ悩んでおります。お医者さまは心臓がひどく悪いから、生きている人間の心臓を食う以外には良藥はないと言われましたが、もしも老師がそのお体を虎狼に与えてもよいとお考えでしたら、曲げて一つ、人間一人の生命を救う方向へ考え直して頂けないものでしょうか？」

宗素がおそろおそろ頼んでみると、その老

僧は、

「よいともよいとも。どうせ野獸の喰うのに委せようというこの身体じゃ。人間の生命が助かるというのなら、その方に上げた方がねうちが上ると言うものじゃ。したが、儂は今日はまだ何も食ってはおらんから、先に何か食べてから、それから儂の心臓を進ぜるでしょう。」

と言うのである。宗素は小躍りせんばかりに喜んで、早速持っていた御馳走を老僧の前に進めた。老僧は、食うわ食うわ、その御馳走をあつという間に平らげ尽すと、又宗素に言った。

「さてさて今日が分のお齋を頂いた。これから四方の神靈にお別れの拝礼をするから、少しく待つがよい。」

老僧は立ち上ってその衣を整え、石窟から出て、恭々しく東の方を拝礼した。これが終ると、今度はやにわに傍らにある一本の大樹の上に躍り上った。宗素は、神通変化、誠に驚くべき神技だわいと感心していると、老僧は激しい声で宗素を大樹の下へ呼びつけて云った。

「檀越どの！ 先におん身の求めたのは何じゃったか？」

「生きている人の心臓を頂いて、吾が父の疾を治さんとの心組みでございます。」

「そうか。檀越どのの希望を儂はすでに許した訳だな。今、先に金剛經の奥妙を説き教えようと思うがどうじゃ？」

「私めはもとより仏教を尊いものと思うておりまするによつて、何とぞお聞かせ下さい。」

「さればじゃ、よいかな、金剛經にはこう書いてあるのじゃ。」

過去心不可得。現在心不可得。未来心不可得とな。檀越殿が、もし吾が心の臓を取ろうと思つても、それ、その不可得というやつじゃよ！」

老僧は怒鳴り終ると、忽ち身をひるがえし一声大きく、けだものめいた咆吼をしたかと思つと、するすると断崖をよじ登って行ったが、化して去るその後姿は一匹の猿であつた。



身を捨てる信念

——体験を語る——

正力 松太郎

私は、越中富山の生まれである。ご承知のように、北陸方面は念仏信仰の篤いところで、かならず、毎朝毎晩、仏壇にむかってお詣りすることを習慣として養われる。私も二つ三つの幼少のころより、母の膝にだかれて、朝晩の日課として、仏壇に手を合せて、ナンマNDERナンマNDERと唱えさせられたものである。

母は、正信偈を読み、「南無阿弥陀仏」といくども繰りかえし唱えたあと、「悪いことをすると地獄へゆき、善いことをすると極楽へゆく、生きものは殺してはいかん」とかならず、子供たちを諭したものである。

私は、中学時代、学業のかたわら剣道を五年間、高校、大学を通じて柔道を七年間やり、さらに警視庁に入ってから職務の余暇に柔道と剣道を四年間やった。それほど、私は武道が好きであり、また両親が非常に熱心に奨励した

ので、どうにかして武道が上達したいと願っていたのである。

ところが、大学に進学したころ、柳生但馬守や宮本武蔵の本を読んで、武道のある境地に到達するには、どうしても禪が必要だ、心を練ることが必要だ、ということに気がついた。そこで、大学の一年の試験が終ると、すぐ郷里の富山へ帰って両親にその話をし、翌日また東京の下宿にもどって、早速、本郷の動坂で庵を結んでいた勝峰大徹老師の門をたたいた。

大徹和尚が、南禅寺の前管長として、当時の非常な名僧だと聞いていたので、この和尚に頼んでみようと思ったからである。今から思うと、全く汗顔の至りであるが、何の紹介もなしに、大徹和尚を訪ねて直談判した。和尚も、私の熱心さに驚き、面白い学生だとも思ったのか、非常に

喜んで迎えてくれた。「手前が禪をやるには、まず数息観（すそくかん）をやれ、姿勢を正しくして、息をととのえ線香一本分の時間でいいから、毎日何回でも出来るだけ多く一生懸命やれ」と訓えてくれた。

そこで、訓えられた通り、しびれる足を我慢しながら、もっぱら数息観を続けていたが、一月ほどたって、和尚から「無字」の考案というものを出された。そのとき和尚は「手前は頭で物を考えてはだめだ、肚で考えろ」というのである。とにかく、理屈に走るな、ということであった。

しかし、一切の観念や雑念を断ち切って、真如を観ずる、ということとは、それこそ理屈では解るような気がしても、いざ何だ、と問いつめられたら、そんな大問題の前には、私などまるで手足も動かせない赤ん坊同然であった。「無字」の公案という怪物に対して、打込めずにいるナマクラ剣士のように、その周囲をぐるぐる回っていたのである。

それから、三十五年間というものは、警視庁に、あるいは新聞社に、寸暇もなく追い回されながら働きまくった。いま、自分のあゆんだ生涯をふりかえってみて、私ほど波らんの多い人生を歩んだものも少ないであろう。よく今まで命があったものだ、われながら不思議に思うくらいであった。日本刀で首筋を切られたり、石で頭を撃たれ

たり、ピストルでねらわれたことなどあって、殺されかけたことが度々であった。

ご承知のように、終戦になると同時に、アメリカ軍は日本国をどうして弱体化するか、ということとで頭をしぼった。その一つとして、まず言論機関を抑えなければならぬ。それと同時に監獄にいた共産党員を釈放した。その計画は成功し、まず朝日新聞でストライキをおこし、幹部の総辞職を迫った。つぎが読売新聞であった。そして、これはすぐ毎日新聞へ波及した。

私は、この混乱した世情をみて、このままでは日本はだめになってしまふ。命を賭してもこれと戦わねばならないと覚悟を固めた。そのときに、いちはやく私に脅迫状が舞い込んできた。……お前は即座に読売新聞社長をやめよ。しからずんばお前をただちに射殺する……という文面であった。しかも、それは念のいったことに速達郵便で来た。私は警視庁時代に暗殺の脅迫状を何回となく受取ったが、脅迫状を速達で届けられたのは、はじめてであった。

そのとき、私の胸をうったのは、これはほんとに俺を殺す気だな、という予感であった。それなら猶更、私は命を賭して戦おうと決心したのである。そこで当時の自由党の総裁であった鳩山一郎さんをはじめ、檜橋内閣書記官長、

伊藤共同通信社理事長、そのほかの人からも仲裁を申出て来たが、私は強く断わった。もし、私がここで譲ったり、下手に妥協をしたら、日本の経済界全体が破壊されると思った。それで、私は、あらゆる仲裁を断り、断固として闘ったので、争議は紛糾して二カ月以上も続いた。

この間に、争議団側は暴力をもって読売の社屋を占拠し新聞発行権まで奪取したので、争議団側幹部を告発した。検事局も幹部数人を召喚して取調べ、起訴する意向であったが、夕刻になって突如として釈放してしまった。これはアメリカ軍の命令によったものだと言われている。のみならず、争議団側は、紙面を使って私に不当な攻撃をつづけたので、私は、東京都の委員会ですべた自己の主張をパンフレットにしようとしたが、どこの印刷所でも、後難を恐れてか引き受けてくれなかった。ようやく凸版印刷の山田三郎太社長が引き受けてくれた。ところが、これがため凸版印刷の労働者がストライキまで起したのである。

しかし、ようやくにして、このパンフレットが一部刷りあがったところ、アメリカ軍が検閲を行なうと発表し、配布を禁止してしまった。そこへ突然、アメリカ軍から、私を巢鴨に收容する、という命令が来たのである。読売新聞争議団は、「社長收容」と大きく掲示して氣勢をあげた。

しかし、私はまだ收容までに九日間ある、妥協は絶対にしないぞ、という固い決心であくまで闘いつづけた。したがった、巢鴨に收容されるという実感など、そのときの私には、全然わいてこなかった。ただ、問題は争議の解決という一点にあった。

いよいよ談判に入ると、争議団側の交渉代表者は、読売新聞の経営管理を主張したが、私は断固として、これを拒絶して交渉が破れ、かれらが深夜退場すること三回にも及んだが、ついに、経営協議会を作ることと、私の後任の社長、および重役は、私の推薦によることとして幸い争議は解決したのである。私は、夕方帰宅して、へとへと体をやすめる間もなく、後任の社長に事務の引継ぎをして、ようやく床に就いた。そして、翌朝八時に刑事が来て、私はそのまま巢鴨へ收容されたのである。

こういう、さまざまないきさつが私にはあったから、もっとも自己を見究めねばならないと真剣に考えた。

巢鴨では、夏は五時、冬は五時半に起される。起きると同時に部屋の掃除をし、それから朝食をとる。自分の腕をもって食事をもらいにゆくのである。これは大臣であろうが、大将であろうがみな自分でやらなければならない。東条さんも、梨本宮さままでも一緒であった。食事が済むと

部屋の点検がはじまる。それが済むと今度は労働に引き出される。それから帰って昼食、そして、午後は運動、その間には、ときどき点検がある。といったぐあい、自分の自由な時間を得ることは、仲々容易なことではなかった。

それでも、雨の日は運動がないので、自由な時間を八時間から九時間とれるのである。それで暇あえあれば、坐禪をやり、その他余裕があれば宗教の本を読み、私は非常に充実した時間を送ることができた。私どもの部屋は、はじめ私一人であったが、四月ほどたって四人になり五人になった。そして最後の一年間は、文部大臣をした太田耕造君や、精神家で有名な大倉邦彦君が一緒であった。

一番私の困ったことは、坐禪を組んでいるとき、一人の場合は何んでもないが、周囲の人がいて話されると、雑念を入れまいと思えば思うほど、人の話声が耳に入ってくることであった。これではまだまだ修行が足りないと思われる。でも、凡夫のあさましきで、どうにも仕方がない。

人の自由を束縛するわけにはゆかず、どうも、心が乱れてしょうがない。それで一計を案じた。幸いなかに碁の好きなのがいたから、もう一人に碁をすすめた。獄中では紙で碁の道具を作るのである。二人が碁を打っていると、他の一人も黙っている。そうすると、いくらか心が乱れない

ようになった。ともあれ、私は大徹和尚のことを思い出して、在監一年九カ月の間、こうして坐禪をしつづけた。それは、他の人たちにとっては、短かい坐禪の期間であるかもしれないがとにかく私にとっては、自分の精魂を打込んで坐ったのであるから、この二年間は、私は自分の一生涯のうちで一番充実した時間であったと思っている。しかし、娑婆へでてくると、凡夫のあさましきで、坐禪修行もできなくなってしまったのである。

しかしながら、いまこの年になって泌々と感ずることは幼少のころ、母にお説教された「因果応報」が身にしみわたって居り、「悪いことをすれば地獄へゆくんだ。善いことをすれば極楽へゆくんだ」という言葉が耳にしっかりと残っている。それが私の生活を貫く倫理観であり、さらに青年時代に入門した坐禪を通して、一心に専念する、という実践的信条が、いまの私の支柱となっている。古歌に「ふりおろす太刀の下こそ地獄なれ身を捨ててこそ浮ぶ瀬もあれ」とあるが、自分だけを大切にまもっていては、大事は決して成就されない。世のなかで自分だけ欲張りで成功した人間はない。どんな場合でも、常に相手のことを考えてやる寛容さが必要である。

(読売新聞社主、元国務大臣、日本テレビ社長)

水子と念仏

椎尾 弁 匡

私の生涯は、今になって考えると、南無阿彌陀仏に育てられた生涯だった、と思う点があります。一つは母親の胎内にいる時分にど

んなように念仏に育てられたか、小学校時代になんかになったか、それを出てから僧侶になつてどんなになったか、学問として仏教をやるのにどんなであったかと分けて私を考えますと、その各々に念仏に育てられた私があ

るのです。ああそうだったかなと今頃思うのであります。

第一に云いました母親に育てられた頃という、これは私が三十歳になる明治三十八年まで遡るのですが、殊に私が考えたのは母親のお腹の中にいる時分、母親がどんな風に育てたか。これはよく聞いておかなかったのですが、事実、私は考えてもおかなかったのですが、妙なことに十年このかた、確かに母親の生涯の中にもめずらしく母親が念仏で私を育てたんだと思うようになったのです。

私は明治九年七月六日の誕生になっていますが、それは太陽暦が行われてからの戸籍ですからそうなっていますが、旧の閏の五月十五日のお昼に生んだといいました。そして還暦になってから、やっぱりそんなように廻って来たのでそう思ったのですが、その時分、母

親は三十六という、まあ相当十分に育った頃で、私の一番上の兄は母親が十七の時生んだのですから、まだ母胎も十分育たず、家庭生活にも十分に慣れず、子供が出来たらどうするか、どのような胎教をするのか未だ考えていなかったらしいです。

それから私は戸籍では五男となっていますから、五人目のようですが、実は、明治六年に生れた双子がありまして、それが一カ月の内に死んでしまったのです。戸籍にも届けないから、私は繰り上げ当選で、六男にはならず五男になっているのです。そのことです。が、女としてもう円熟した時分であり、しかも双子が相繼いで死んだ肉体的・精神的の上に、母親がいくらか弱ったとか故障があったとかはよく判りませんが、その次に私が生れて来たので余程静かに完全に生みたいという気があったのでしょう。つまり安産を願うことは無論あったでしょうが、それ以上に相当よく念仏したと思うのです。

それは終戦頃、ここ、増上寺に来るようになってから、そして水子の供養をやれということ、お盆や彼岸にやります。実にたく



さんのお母さん達が来る。それで、ふとお経を読んで何になるんだと考えてみる度に、私の上に水子が、しかも二人もあつたではないかと、今まで何とも思わないで来たが、八十にまで生きて来たのは兄弟のうちにも兄と私と二人だ、あとの兄弟は皆死んでしまった。それが丁度少ない庭の実にすると大きな実になるとか、菊の蕾を減らすと大きな花が咲くように、この二人の水子の犠牲でなつたとか供養してくれたとかで私がこの長生きの大き

反省と勤労と煩惱

あるとき釈尊はこう語られました。

気が早くて怒りっぽい男がいました。ある時、その男の家の前を通りかかった二人の人が噂をしました。

「この人は大変善い人だが、気の早いのと怒りっぽいのがいけない」

すると男が出てきて、持ち前の怒りっぽさを発し、二人の人に打ってかかり、乱暴をしました。

賢い人は、自分の過ちを教えられれば、反省をして改めます。愚かな人は、自分の過ちを説かれると、かえってその過ちを再度重ね

な生涯を作るようになったらしい。

改めて数十年前まで、むろんみたこともない私の前にでた二人の水子に向つて合掌し、同時に来るお母さん達にも、「あなた方が前に失くした水子が可愛そうだとか、すまなかつたとか、後の子供が丈夫に育つようにとか思いなされるのはもつともで、私が水子を失つたことによつて一番長生きすることになつた。」とこう考えるようになったのです。

これは数千の水子のお母さんを眺めていることだと思います。

○

金持ちで愚かな人がありました。ある時、高く聳えた美しい三層の家をみて、自分も高樓が欲しくなりました。

早速大工を呼んで建築を命じました。大工は、まづ基礎を作り、地階を立て、二階を組んで三層に進むことになりました。これを見た主人はいいました。

「私の求めるのは三層の家である。基礎や地階や二階はどうでもよい。早く高樓を作つてもらいたい」

愚かな人は、つとめ励むことを知らないでただ良い結果だけを求めます。しかし土台の

とによつて、私には水子のことと母親が新しい念仏ができるようになりお拜みを強くするようになったということを思い出すのです。

そこで、近来、私は胎教のことを全国で講演したけれども、それに深く感じたのは母親が兄弟の中で特殊に胎教をし、よくまた後生を想い念仏を申された時であつたからだ云うことを、最近漸くこの五年この方、特別に深く母親がなくなつて、五十年が経つてから後でありますから深く感じております。

ない三層はあり得ないと同じように、つとめ励むことがなくて、よい結果が得られる筈がありません。

○

ある人が蜜を煮ていました。そこへ親友が来たので蜜を御馳走しようと思ひ、火にかけたまま、扇であおいで冷やそうとしました。しかし火から下さずに熾いでも、蜜が冷える道理がありません。

愚かな人は、煩惱の火を消さないで、清涼の悟りという蜜を得ようとしませんが、ついに得られる道理がありません。悟りという蜜を口に入れるためにはそれを邪魔している煩惱の火を消すことを、さきにすべきです。

王子のゆめ

水口 正 宏

南の国
のお日さ
まは、王
さまの御
殿の花壇
に咲いて
いるカン
ナやケシ
の花の色
よりもも



っと赤く、ちょうど火が燃えているときのよう
にじりじりと地面に照りつけるのです。毎
日、暑い日が続くので、大人たちはお日さま
の高いうちは仕事を休んで、樹の下や家のか
げでひる寝をして過ごしました。

この国の王さまには、ムッターという王子
がいましたが、ひとり子だったので、王さ

まは王子の遊びあいてに大臣を一人つけたり
御殿の庭にシカやサルを飼ったりしておひま
した。けれども国のならわし通り、おひるに
なるとこの大臣も、そればかりではなく動物
たちまでもがグウグウと寝てしまうので、王
子はそれがとても不服でなりませんでした。

「ああ、ボクはどうしてこんな暑い国の王
子なんかに生まれてきたんだろうなあ。みん
なひる寝ばかりしていてちっともボクと遊ん
でくれやしない。つまらないなあ……」

といつもそんなことばかり、つぶやいてい
ました。まひるだというのにどこへ行ってし
まったのか一羽だってやさしい声を聞かせて
くれるような小鳥さえもいなかったのです。

御殿のすぐわきに、大きな池がありました
一人ぼっちの王子はよくその池のふちに行っ
て、水の上に見える波の輪や、木の葉の舟が

動くのを見ては心をなぐさめていました。

ある日のこと、ムッター王子はいいことを
思いつきました。

「そうだ、ボクもいかだを作ってこの池に
浮かべて遊ぼう」

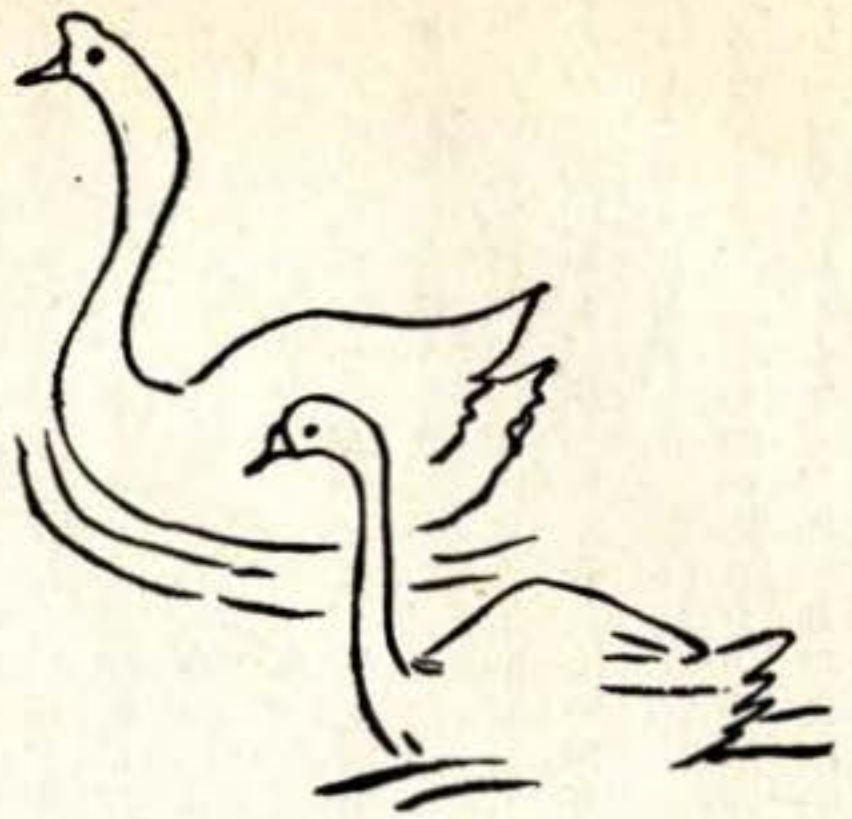
そう決めると王子はさっそく自分が乗れる
くらい大きないかだを組み始めました。テン
トのような日よけをつけたいかだができあが
ると、王子はすっかり有頂天になって、

「わあ、すごいぞ、ロビンソン、クルーソ
ーのよりも立派だなア。これならば海へ出て



も、大丈夫かもしれないぞ。このいかだに乗
って、どこか遠くの涼しい国へ行ってみたい
なア」

とひとりごとをいいました。そんなことを

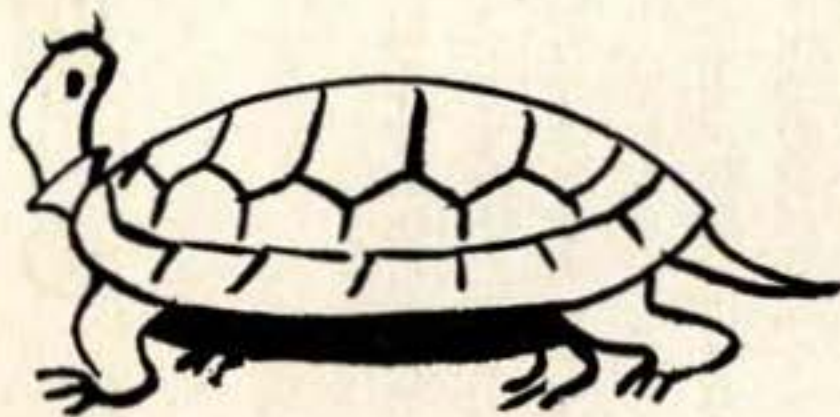


のいかだに乗って遠くの国へ行きたいとおっしゃいましたネ。でもそれはおやめになった方がいいですよ」

「ねえ、カメさん、それはどうしてなの」

「それならば話してあげましょうか」

『わたしの友だちがあるとき、この池に遊びにきた二羽のハクチョウと親しくなったのです。そしてそのハクチョウから、北の国の湖は水がとてもきれいに澄んでいて気持ちいいところであることを聞かされて、すっかり惚つてみたくなつたのです。わたしの友だちは、やもたてもたまらなくなつて連れていくてくれるように一生懸命、ハクチョウに頼みました。二羽のハクチョウはためらっていましたが、相談のすえに連れていくことに決めたのです。わたしの友だちは一本の棒をくわえ、二羽のハクチ



ョウがその両端をくわえて空の大旅行が始まりました。ところがどうでしょう。ハクチョウたちの湖が近づくにつれて空気が冷めたくなってきたので友だちはすっかり寒くなり、とうとうクシャミをしてしまったのです。もちろん地面まで落ちてコウラにひびをいらせる大けがをしてしまったのです……』

「王子さま、よその土地はどこでもみなよく見えるものなんです。けれどもむやみにそこへ行きたがると、わたしの友だちのような目に合いますよ」

「ふーん、そうかなあでもボクはやっぱり涼しくて、友だちのおおぜいいる国へ行きたくないなあ」

「それならば、王子さま、これから毎日この池にいらっしゃい。わたしがいろいろなお話をしてあげますから」

ムッター王子がねむりからさめたとき、池の面にはもう夕方の涼しい風が吹きはじめていました。

王子はまたあすもこの池で遊ぼうと思いましたが。

考えながら王子のいかだが池のちょうど中ほどまできたとき、だれかがムッター王子の名まえを呼ぶのです。

「はてな、こんな池の真ン中でボクの名まえを呼ぶのは、一体、だれだろう」

あたりを見まわすと、一匹のカメが水の上に顔を出していました。

「王子さま、こんにちわ」

「ああ、カメさんかい、ビックリするじゃないか」

「ムッター王子さま、あなたはさっき、そ



実 話

ラーゲルの思い出

その一

割 腹 の 前 後

吉 野 翠 幹

言葉の意味の違いで、時には面白いことがある。

戦後ソ連に抑留されていたとき、工事現場の監督たちとよく口論をした。監督としてはノルマだけは仕事をさせたいだろうし、こちらとしては、先方が勝手に決めたノルマ等は知ったことでない。しかもノルマは最良の環境で、最善の努力をした場合の仕事量によって決められたものであるから、その組のノルマとは違えられないのが当然で、監督はノルマの遂行を目標にやかましいし、こちらとしては兵隊たちに無理のないよう仕事をさせたのが本心である。従つて監督とはいつも喧嘩ということになる。

こう申すと、こちらが一応ロシア語に通じているように見えるが、これがまた甚だ心細

い限りで、聞きおぼえの片言をならべ立てるのが精一杯で、後は主として手ぶり足まねが重要な役割を果す。こうなると監督はますます焦立って、早口でまくしたてることとなる。もはや万策つき、三十六計黙るにしかず相手が口角泡をとばす光景を半ば呆れながら眺めるという次第。こちらが黙ると、それに比例して相手は激昂する。遂に相手はこちらを罵倒する順序となる。

「サムライ！ ハラキリ」

先方としては、三千世界にこれ以上ないという最下低の罵言のつもりだが、こちらとしては、侍の腹切りといわれて、思わず苦笑することとなる。こちらがニヤリとすると、さすが囚人相手に鍛え上げた監督君も、顔を真赤にして、立ち去るのが普通である。

これは以前に歌舞伎劇が、かの地で公演したしものが忠臣蔵であつたので、それ以来、侍、腹切りが最も下等な罵倒の用語となつたものらしい。野蛮人とか人喰人種とかに相当する言葉であつて、この言葉を口にした相手の方が恥かしい思いで真赤になるという位のものであつた。

監督と喧嘩をして、馬鹿にされてばかりいるわけにはゆかない。今度はこちらでも罵倒したくなるのも人情で、事実そんな場合も度々であつた。そんな時は、

「何を露助め」

と思いきり大声でとなりつけてやる。すると相手は必ずモチモチして温和しくなる。というより滴更悪くない素振りを示して、逆に話は和解ということになる。

これは相手にはロスキーと聞えるらしく、話の途中で「旦那さん」と呼びかけられたと同じ結果となった。しかし「露助」という言葉は、こちらの共産諸氏から禁止させられた。要するに帝国主義時代の言葉を禁ずるという布告が出されて、それ以来やめてしまった。

もう一つ例を挙げる。初対面にはお互に氏名をいうのが礼儀である。その時、こちらは「吉野さんです」という如く、自分の名前をさんづけにしておく。もちろんこちらのお互同士も、必ずさんづけで呼び合うように注意する。従つて監督諸君もこつちを呼ぶ時、例えばどんなに怒っていても、どんな文句をいうときも、「吉野さん」とさんをつけてくる。恐らく日本人の氏名の語尾は「さん」で終ると彼らが理解したのであろう。こちらとしては如何なる場合でも、決して悪い気持はしない。事情がたて混んで、監督がとなり廻っている時も、誰かれなしに「さん」づけで怒っているのは、まことによいものであった。しかしこれも共産諸氏が相手方に内報するに及んで、自然になくなった。

かくの如くソ連人にとって、最下劣の言葉「侍の腹切」を、わがラーゲル（収容所——千人単位）の医務室で実演する事件が起きたので、第一から第六まであったラーゲルのソ連側一同が前世紀の怪物が出現した時と同じように吃驚仰天したのも無理ではなかった。医務室の構成は、ソ連軍医二名、日本軍医一名、日本衛生下士官二名と衛生兵若干というわけで、入院室を有する別棟なので一寸した田舎の病院というところであった。ソ連軍医の一名は、渾名をデクといい、見上げるように大きな身体であった。もう一名は、渾名をカラスといい、女軍医中尉で、ウズベック人らしく、どちらが顔か頭か判らぬ位に色が黒かったが、さすが女性らしい愛嬌があつて評判は悪くなかった。そして主任務が虱退治でないかと思われる位に、虱退治に熱心だった。

ラーゲルに来る軍医は程度が低いとみえて聴診器一つ持っていなかった。ある時、外を行軍していて、兵士が気分が悪いといい、軍医に診断を乞うたことがある。やがて軍医は兵士のボタンを脱させ、自分の耳を兵士の胸

に持つて行つた。外の兵士が思わずフキ出したが、その軍医は何がおかしいという顔つきだったので、笑うに笑えず困ったことがある。またわがデクにしろカラスにしろ、聴診器は木製で玩具のラッパのような形をしている。これを片手に握つて、一方を患者の胸に、他方を自分の耳にあてて結局横を向いたまま診察することとなる。

さすが日本の軍医は、あちら側にもこちら側にも信頼されていた。軍医三年やれば素人に近くなる等といわれながらも、やはり日本軍医には權威があつて、事実彼一人が診断治療を行い、午後からは一般のソ連人から招かれて往診に忙しかつた。医は仁術とか、敵からも味方からもあげて尊敬され、また救世の仕事をやつてのけたのは日本軍医であつた。

衛生下士官の一人は安藤曹長で、立派な体格をし、柔剣道の達人ではなかつたかと思わせる偉丈夫だった。技術の点でもソ連軍医より数等上の信頼が持たれ、日本軍医のいない時は、彼が診察を行つた。もう一人は森伍長で、これが風変りな男で、言葉も動作も全部女性と同じであつた。またラーゲル演芸会の

花形でもあった。どこから都合つけるのか、和服姿で胸高に帯を結んだところは、どうみても「女」であった。そればかりでなく、当日の出演者の着付から化粧に至るまで、一人で世話をするので、演芸会になくてならぬ一人であった。「わたしは舞台に上ると、腰のあたりばかりみているワ」等といわれると、「彼奴の罌丸みてみたい」という兵隊が現われてくるゆえんである。しかし一度勤務となると、まことに勤勉であり、誠実であり、親切であった。特に入室患者の中には彼の看護ぶりに対し終生忘れ得ない感謝の念を持っている者が多かった。

さてある日の午後三時頃、大陸性気候のまんな中であって、暑さにうだった医務室で、安藤曹長がいきなりシャツを脱いだが、身体をふくのかと、誰も不思議に思うものがなかった。その安藤曹長が裸になると、いきなり棚からメスを取りだし、わし掴みにすると自分の腹を目茶苦茶に切りたててしまった。

何しろ突然も突然、暑さで気でも狂ったか伝説的存在であつた割腹が目の前で行われたのである。折から日本軍医は往診のため不在

であつた。デクの如きは腰でも抜けたか呆然自失、夢でもみている如く座ったまま動かなかった。さすが女のカラスは、奇妙な叫び声をあげたまま、外にとび出してしまった。

こうなると、さすが日本軍下士官森伍長は普段でこそ女形であつたが、どこにこれだけの力があつたかと思われる位の活躍ぶりであつた。身体のかなな安藤曹長を組み伏せて、メスを取りあげ、手早く処置を行った動作は後になって誰一人感服しないものになかつた程、見事なことであつた。

しかし力自慢の安藤曹長の割腹なので、手当のかひなく出血多量で、間もなく息を引きとってしまった。

この事件のおかげで、ソ連軍医の株がまた一段下ってしまった。平常は薬用アルコールを一滴残らず飲んでしまつても、また炊事に肉の配給があると上等のところをピンはねしたにしても、毒にも薬にもならぬ二人であつたが、突発事故に出あつて何んの役にも立たないことを証明したばかりか、いかに女でも軍医でありながら逃げてしまったカラスの評判のよいわけがなかつた。

死体はその日の内に、ラーゲルから運び去られ、翌日墓地に埋葬された。墓地といつても日本兵士が何人も埋められたというだけで墓標一つあるわけではなかつた。そして同じ翌日にはソ連軍医二名とも、どこか遠くに転任となり、日本軍医も他のラーゲルに移されてしまった。こうして事件は裏面のショックをそのままにして一応片づいたわけである。

それなら安藤曹長が何故自殺をしたのか、その理由について誰も知る者はなかつた。医務室勤務は、例の労働に出るわけでなし、ソ連側からも一応の待遇を受けていた。当の安藤曹長は、健康上も、勤務上も立派であつたし、思いつめるような事があるとも思えなかつた。あれこれ推理を行つてみたが、結局死の抗議であつたろうということになった。しかし何ものに対する抗議だったか、この点についてどう考えても納得できる事がらがみつからなかつた。

理由は何か、判らぬながら、どうやら一同の意見の括つたのに次の二つのことが考えられた。

一つはソ連軍医のラーゲル運営に対する抗

議であつた。外傷は別であるが、下痢にしても風邪にしても、体温が八度以下の者に対しては患者扱いをしなかつた。従つて当然労働に出されるし、仕事場ではノルマが待つてゐた。多少はこちらの演出もあつたと思うが、朝整列して労働に出かけるときに、両腕を戦友にかかえられ、ロクに歩けそうにもない者まで労働にかり出された。しかしこれは冬から初夏にかけての話で、いつか戦友に支えられて労働に出かける風景もなくなつた。

初夏から真夏にかけて、ラーゲルでは南京虫に攻められて困つた。夜目がさめると、壁一面南京虫が動いていた。これをつぶすと、壁一面がまっかになつた。時には寝台を分解してまで消毒することがあつたが、不思議なことに消毒のあつた日は一層南京虫に攻められた。とうとう小屋を南京虫にあげ渡し、人間は外に寝て、ようやく難を免れたものである。しかし明方は毛布一枚では寒くて目が覚める位に冷えるので、しまいには下痢患がふえて困つた。

安藤曹長がこうした実情に抗議したというのだがもう一つの理由は更におかしなもので

あつた。

例の女カラスが、急に虱検査を思ひたち、第一に安藤曹長を素裸にして検べたという。帝国軍人衛生曹長殿をまっ裸のまま、直立不動に立たせ、カラスが甚だ失礼な検査をしたという。しかしまさか、そのために割腹したとは信ずる方がおかしい位であつた。

結局のところ、安藤曹長の割腹の原因は、誰しも解らないどころか、想像さえできないままに終つてしまつた。そして相変らずの監督相手にノルマの交渉が続いた。この交渉はラーゲルのソ連将校もこちらの味方になつて闘つてくれた。また共産主義の攻勢に対するいざこざがあつた。この攻勢は日本人同士のもので、決してソ連将校は強制しないし、監督はこの点になるとこちらの味方になつて、日本人共産諸氏に対抗してくれた。これらの話は別のこととして、夏が終り、秋も過ぎ、酷寒の冬がきた。

一日の労働を終つて帰ると、寝るのが一番の楽しみで、毎日の疲労の程度は、帰国の夢さえ見せてくれない位であつた。

そんなある夜、フト目が覚めて便所にゆき

たくなつた。便所といつても、七八十米は離れたところにあり、シャツの上に防寒外套（日本製の毛皮）を着てゆくのであつた。広いラーゲルの中を、わずかに星明りをたよりに独りゆくのは、なれた所とはいへ余りよい気持はしない。便所で用をたしていると、かすかであるが音が聞えてきた。耳をすませてみると、たしかに誰かが、石灰をまいてゐる気配と感ぜられた。もちろんこんな真夜中に、便所を消毒する者があるとは思えないが、さりとてその他の音とはどうしてもききとれなかつた。しばらくすると音がやんだが、用をすませたので外に出た。何の気なしにいくつもある小屋と小屋の横丁をみたとき、白いなりをした兵士が一人、医務室の方に静かに歩いて行つた。

それをみた途端、あれは安藤曹長だと感じた。すると薄く見えていた白いなりの兵士の姿が目一杯に映るような気持になつた。思わずブルツと身がふるえ、一目散に自分の小屋に馳込んだ。毛布を頭からかぶつて、明日にそなえて早く睡ろうとすると、衛生下士の白衣が頭にかぶつてくるのであつた。



近代高僧伝

梶 宝 順

大橋 俊 雄

ったという。そして明朗であり、ハイカラな面もそなえていた。

大正といえど何か三昔も四昔もするといった古い時代という感がするのに、彼の住家には電話もあればガス燈・電鈴もあり、水道もひかれていた。寝室は別設してベッドがおかれ、まわりはガラス戸。事務室には大事務用のデスクと回転椅子もそなえつけられ、オルガンもあるといったような近代的設備がほどこされていた。彼のもっていた万年筆はアメリカから初めて一ダース輸入され、丸善から売り出されたオターマンであったと言い、オルガンもひけば自転車にものった、と言えどとかく保守的であった教界において、いかに文化の先端をゆく人であったかが想像できるであろう。従って仏教に音楽をとり入れることに心も傾け、来馬琢道とはかつて仏教音楽会を創立したのは明治四十一年三月のことであり、仏教唱歌の普及には特に注意をむけていた。そればかりではなく仏教少年協会をつくって、大いに青少年たちに宗教的感化を鼓吹したこともあった。彼は一面実に頑固で融通性に欠けていたが、極めて親切な人で

明治から大正にかけての頃、宗門文化の上に貢献した人は数多いが、その先駆的立場にあった人は梶宝順であった。彼が三河国岡崎本多藩の家老梶董次郎の長男として、額田郡六名村に生れたのは元治元年八月廿五日であり、明治十一年春には父を失い、その秋岡崎西岸寺に入り高木隆宝について得度し仏門の人となった。故国にあって法務にたずさわっていた彼も、長ずるに及んで何時までも田舎にひきこもって居るべきではない、東京に出て宗門のためにつくしたいという念願にもえ一時は引きとめられたけれども、同十九年福

田行誠をたよって上京し、その後西条公道とはかつて「能潤新報」を発行したが、これがそもそも宝順をして宗門出版文化の上に足をふみいれるきっかけとなったようである。この雑誌が廿二年古河老川の手につり「仏教」と改題されるや、彼は主筆古河をたすけて専らその経営にあたり、三十一年には東光社を増上寺山内に設けて、九月雑誌「東光」を発行、自坊貞岩寺を東光支社として発行と経営に従事したが、彼は三河古武士の風格をそなえ、東奔西走寸暇をさいて仕事をしたせいか日常生活も極めて規則正しく、時間的であ

あり、又実行家であつた。新らしい空氣を常にすいこんで消化し、自己葉籠中のものとし、進んでその実現につとめようとした人である。何事に対しても刻苦精勵し、真面目な性格は誰からも同情をあつめ、それだけに全く血みどろになつて努力した仕事は、仏教界の先鞭をつとめただけではなく、多くの仕事を達成する原動力となつた。

その中でも文書の出版と、伝道文化事業は大書すべきもので、「行誡上人全集」の如き三十二年一月出版されたが、それは実に二十七年から計画を立て、五カ年の間たえまなく識者の門をたたいて資料の蒐集をつづけられた成果であり、のみならず九百三十六頁もの大著を世におくつたということは、經濟的にも容易なことではなかつたであろう。勿論彼は浅草吉野町の自坊貞岩寺に經世書院をつくり、当時八十八冊もの単行本を発行し、中には「仏教小説読切物語連夜説教」という善之丞とか角張成阿・熊谷直実をとり扱った仏教的色彩を濃厚にもつ通俗的な小説もあつた。これは可成りヒットしたようで売れ行きもよかつたらしい。曾つて渡辺海旭は、彼の著「

縮刷法然上人行狀画図」は終生における代表的著作であり、宗門文化に対する一代の功績であつたと述べたことがあつた。思うに此書は四十八巻伝を袖珍ポケット型とし、しかも文中に精密な写真版の絵数十枚をのせ、標頭には見出しをつけ、更に索引をそえるなどして携帯に便なるようにした法然上人伝である。この位のことなら誰にでも出来そうであるが、それは完成されてからの話。着眼誠に結構なこのような企ては到底凡人にはできないものではない。宝順のような常に新らしきものを学び、出版を手がけ、読者がどのようなものを求めているかということに適確につかんでいる人でなければ容易に発想できるものではない。

法然上人の七百年御忌当時、布教を志す僧侶の多くは何等の報酬を求めることもせず、名誉をもすてて宗法興隆のために、法要のほかは毎日街道に出て法を説いた。どの町にもどの公園にも伝道隊の出なかつたことはなかつたというほどの日々の連続であり、又それだけに活気を呈していた。その頃彼は第一大教区の北部伝道隊長として、何かと疎通を欠

く宗務所・増上寺・伝道隊員の間を走りまわり、時には憤り時には泣き喜んで、三者の間のとりまとめに努力した。その功は認められ報いられて、文書伝道の功により三級巡教師補教に任ぜられた。大正二年には宗會議員に選ばれたけれども、同四年八月法嗣と定めていた勝道がなくなり、且つ彼の病状が東京在住を許さなくなつたのを機縁として、小田原の常光寺に移られることになった。時に「東光」は終刊号を出して廃刊を宣言され、要務から一切手をひき、ただひたすらに淋しい乍らも静穩な療養生活を送り、念仏生活に入ること六カ年に及んだが、遂に大正九年一月十五日夫人珠子のほか誰一人の肉身にもみとられる事もなく、静かに安養の淨土に歸られた。時に年五十七。夫人も後世にあとをゆだねて移住し、墓守されていたが、苦惱になやまされ側近者を困らせることも屢々、ために東京に連れもどし世話をしようとする人々をしりえに、同十四年五月大磯の浜辺に入水自殺をとげて一生の幕をとじた。彼の最後は淋しいものがあつた。法名を幸蓮社仙譽上人仁阿知足宝順和尚という。

旅先きの珍談



真冬の幽霊

三升家 小勝

まい度ばかばかしいお話しで御機嫌を伺います。手前共の話の中に出て来る人物はてえと熊さんに八さん、それに横丁の御隠居さんと決つて居ります。オイ熊公、何だ八――

とまア高座で口を一つの資本でお給金を頂いて居りますが、今日どうやら人さまの噂にも上るような看板になりましたが、さてこうなる迄の修業なんと言ふものは、こう申しては何ですが今の若い方々には分つて頂けない大変な苦勞を積んで居りますんで。

いえ今日は苦勞話をするのが目的ではございませんから端折りますが、この修業の中の一つに旅と言ふものが入つて居りました。

何人かの気の合つた者同志が弥次喜多氣分

で東海道あたりの宿場々々を乗り打ちするの

でしたが、どんなに辛い使い走り同様の前座でも、ヒヨイとするとヒヨイとなるいい思ひの一つも出来ようかと甘い夢の一つも見様というものですが、師匠から行けと言われた先が北海道で、それも陸前浜街道と言ふ今迄聞いた事もないような街道の宿場を、一つ一つ打つて行くと言ふんですから音をあげました。遠い昔の事なのでどんな顔ぶれだったかはつきり思い出せませんが、幸な事に普段仲のいい柳枝（故人）芝楽（故人）五郎なんて言う悪友が顔付けの中に居りましたんで勇氣百倍「若えうちの旅の修業は、そのまんま身につくんだからしっかりやって来いよ」

と、師匠文楽に激励されて出発したのが十

月も末、途中さまざまな體驗をいたしまして海を渡つて北海道の小樽に着いたのが十一月も末の頃でした。

来る日も来る日も雪又雪で、そろそろ東京へ帰りたくなって私の胸を悲しませたものでした。いくら私だって東京には私の帰りを待ってってくれる人が一人や二人居たんですからお察しを願います。繁華街をチヨイと外れた所の〇〇座（座名は御かんべん願います）、その晩は宵の口からお客様がつめかけ、定刻には身動きならぬ程の大入満員、特にあと二日でここを打ち上げればなつかしの東京へ帰れると言ふんですから楽屋は久しぶりに笑声で満ちて居ります。その晩の高座の芸なんて言ふものは生涯に何度も出来ないと言ふ程のはり切りようで、お客様にも大変満足して頂いて芽出度く閉ネとなりました。

さてこれから本題のお話ですが、御存じのように修業中の若い者は旅籠に泊るなどとは夢にも考えられない時代で、真打ちの師匠達は旅館へ、私を入れて前記の朋輩とお囃し兼手品師さんが、裸電球が寒々と光つていようと言ふ楽屋泊りです。魚の生干しと沢庵に御

飯、御飯だけは沢山食べて下さいとこれは驚く程大きなおひつに一杯入れてありました。さア飯にしようかと一同車座になったその時に、

『お前達今夜はよくやってくれた。これは僕のほんの心持ちだ、一杯やっておくれ』

と、座主さんが一升瓶一本持ち込んでくれました。するめの足かなんか噛り乍ら腹へキユツと泌みる奴をめいめい茶碗に注いで人様には聞かされない馬鹿話を肴にグイグイとやりはじめますと

『お前達に話しておくのを忘れる所だった、僕の言うことを必ず守っておくれいいね』

と座主が真剣な顔つきで坐り直すから、みんな何事かと口へ行く手を止めて座主の口許をみつめました。

『いいかな、これから明け方まで、間違っても楽屋の便所へは入ってくれな。済まないが遠くても客席の方のを使ってくれよ』

『親方、便所がどうかしたんですか』

『出るんだよ』

『へ？ 何がです』

『分らない奴等だな、レスだよ（幽霊）。こ

れこうして出るんだ』

と言うと手の先をフラフラと膝のあたりで振るんです。

『ひえッ』

私達は今迄の陽気さは何処へやら、みんな思わず顔を見合しました。

さア大変、座主は帰っちゃう、酒はなくなる、楽屋の裸電球以外は真ッ闇。御案内の方も多いと思いますが、人気のなくなった劇場なんてものは、そりやア薄ッ気味の悪いものでございますよええ。

さア寝ようとなったが寝る前にどうしても行つて来ないと困る事になった。ええい若え者をおどかさうたつてその手に乗るかい、俺ら江戸ッ児だい、一丁俺らが一番乗りとやつつけるか、者ども続け、てんで五人がそろそろつなが行つたんですが、あすこは一人で満員になる所なんでこんな時には洵に不便です。

最初に柳枝が勢よく戸を開けてやつとか何とか掛声かけて入った迄はよかったんですが二た呼吸もするかしない中にガタンガタンと大きな音を立てて真ッ青な顔をして出て来た

途端座り込んでしまいました。

『デ、デ、タ、タ——』

『ナ、ナ、何が出たんだよッ』

『ウ、ウ、ワ、ワ——』

ただ震えているばかりです。

次が芝楽で——俺がユ一テキにやられたら後を頼むぞ、ナムマイダナムマイダと入る前からぶるぶるです。この芝楽も唇まで青くして出て来た。

『お前どうしたんだよッ』

『どうしたもこうしたもお前、女が泣いてるんだ、何とかチャーンと人の名前を呼んだあと、さめざめと泣くじゃないか——』

と言うんですからもう誰も入ろうと言う者が居ない。そこでやおら立ち上った私が少しも騒がず、なんてのは嘘で正直な所、膝がガクガクです。

『中で何か変った事があつたら構わず開けてくれよ』

まるで遺言でもするような気持ちです。

棧を横にして戸を開けて中に入ると中は真闇、便所の窓から雪明りがかすかに入ります。暫くじつとしていますと、地獄の底か

ら聞えるかと思われる遠い所から

『おきくさアーン』

と細い女の声がインに響いて聞えます。

「ひえッ」と思った途端、ヒーツ、ヒーツと女の泣き声がさもうらめしそうに聞えます。

それでも動かずに辛棒して居ますと、ビューッ。ビューッ。これは完全に雪を捲く風の音です。ハハンこれは風の音だ、風の強弱で女の泣くような声にも聞えれば咽ぶような声にもなるんだなと分りました。大分落着きを取り戻したので窓から首を出す様にして耳をすますと途端に今度は

『おしげさアーン』

と来ました。ぎょッとして思わず首を引っ込めました。よくよく外を見ましたら驚くじゃありませんか、便所の隣りがチョイとした広場があり、これを通り越した所が大きな料理屋兼旅館の調理場なんです。と書けばもうお分りでしょう。女中さん同志が朋輩を呼び合うのか、それとも女中頭の人や女中さんの名を呼んでいる。その真うしろが丁度この開かずの楽屋便所になる次第、風の具合でこれが聞えたり聞えなかったり、聞く方の耳次

第で恨めしくも悲しくも聞えるとい

った具合なんです。僅な時間にこれだけの事がぱつと分ってしまったんですから当時から（当時は文七）小勝は大変頭がよかったわけですね。

それにしても人が悪い、座主には翌日おどかすにも程がある、私達だったからよかったものの、ほかの人に話したら劇場ののれんにもかかわりますよと擦じ込みますと、

『へえ。あれは隣りの物音だったのかね、それを知らないもんだから今迄随分気を使って来たんだよ』

と、これも本当に知らなかったらしいんです。馬鹿に幕切れがアツケなかつたと仰有るんでしょう？ そうなんです。今時怪談咄は流行りませんからね。私もこの辺で失礼さして頂きましょう。この旅先ぎでの珍談奇行の数々は、又何れ時を改めて申上げる事として、さア席亭へ行く時間です。皆様御機嫌よろしう。

危ない愛欲

ある時、世尊はこう話されました。

満々たる河の流れに、

舟を浮べて下る人があった。下るに従って舟あしも速くなり、いかにも楽しそうに見受けられた。岸に立つ人があって、声を嗔して叫んでいた。

「流れを下ることを止めよ。下流には波が立ち、渦があり、わにと夜叉とが住む淵がある。そのまま下ってゆけば、まもなく死なねばならぬ」

舟の人の耳に、岸で叫ぶ声が入ったとみえて、岸の方に舟を向け始めた。しかし流れが速いためか、舟の人の力が弱いためか、やがて再び舟は流れに乗って、前よりも速く下流に進んで行った。

ここで「河の流れに楽しく下る」とは、愛欲に身をゆだね、それに執着することになるので進むに従ってますますその流れから離れられなくなるものである。「波立つ」とは、怒りと悩みの生活のことをいうので、それがすぎてやがて「渦」のあるのは、逆って欲楽が増し、こうなっては、徒らに同じところをぐるぐる廻って、一層抜け出し難い姿をいう。「わにと夜叉の住む淵」とは、享楽を求め、愛欲に沈んでゆく罪の姿が、やがては滅びゆく生活に陥ることをいう。岸で叫ぶ人とは仏をいうのである。

会員だより

◇当支部は約二十年の歴史をもっています。その当時、毎月一回信仰座談会を催すについて、貴誌を利用したのです。毎号連載された聖典講義や信仰相談が、座談会の話題を豊富にしてくれました。また人情で会員になりたいという信者もあって、自然と支部が結成され、まもなく三十名近い会員となりました。時には執筆下さる先生方にも来ていただきましたし、寺に集まれば浄土があるというばかりでなく、おかげで相当の成果をあげることができました。終戦前後の動きがおさまって、再び支部を結成し、同じく貴誌を材料として再発足してみました。終戦後の人心の変化といえはそれまでですが、小生がどう努力してみても以前の成果はもとよりのこと、事実

は失敗しました。その第一はここ何号となく発刊日が一定していないうことでした。それと同じく大切なことは、ただ雑誌を読む話を聞くということでは、支部として成長しないことを知りました。やはり何か行が一緒にならなくては駄目です。集ってお念仏をするという簡単な勤行を行いますが、近代は慣れたと申しますか、それだけではあきられてしまいます。幻燈会、討論会や旅行、団参等も勿論結構で、できるだけ実施しましたが、何かもう一步支部としての行を持つようになりたいと存じます。それやこれやで結局支部は解散のかたちですが、皆さんと共にこの問題を考えてゆきたいと存じます。

(福島・青山)

◇小生の奉職している高校に以前勤務し、今は芸大の助教授である成川武夫氏が最近「あなたの哲学」と題するやさしい哲学入門書を出

版しました、この人は仏教にも関心があり、皆さまに哲学入門書として推せんいたします。

(横須賀・宮沢)

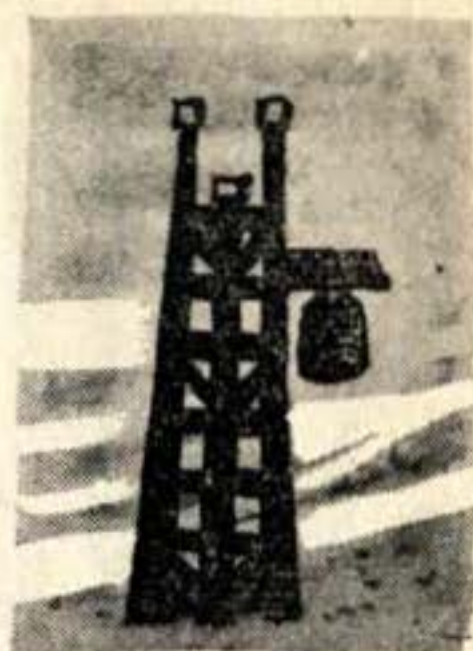
◇かねて伝道講座をまとめたいと思いつながら実行できなかったが、今回「伝道文化講座」としてまとめ、第一輯を出版しました。仏教に限らずすべての宗教の伝道、殊に文書伝道の至難さは、創刊以来十数年を経た今日でも痛感しています。近年、聖典の意識が盛んになり、種々出版されるが、平安の文学調を気取ったり、また藤村詩集まがいのものなど見受けるが、表面だけを綺麗にして内容の教義がおろそかに流れぬよう戒心すべきものです。(長野・丸山園水)

◇読売新聞六月十一日号に学習院教授磯部忠正氏の宗教振興の前提と題する評論を拜見しました。その最初に「宗教不振と宗教不信とされ仏教は今や文字通り四面楚歌の中にあり、先般の宗祖御遠忌はその絢爛豪華のゆえに、ほんとうの宗教を見失ったさびしさを一層激しく覚えるとされています。私もこうした評論をみると、折角宗教の振興についてお考えなのであるのに、逆にうんざりして意欲をなくします。(愛知・山岡)

◇近頃若い人たちの間で、不思議な服装をしているのが気になります。つまり男であって赤いシャツや靴下をはき、女の人で頭髪を赤くそめています。どのような服装をしても個人の勝手とはいえないでしょう。少なくとも他人の眼にふれ街頭を出歩く以上は、他人に不愉快の念を与えてよいということはないでしょう。私はこうした珍妙ななりをしている人々に信仰が皆無だからと思います。宗教家の奮起を望みます。(埼玉、田中)

やすらげき旅路

竹 中 信 常



一、二つの門

パリ見物はエッフェル塔と凱旋門から始まるし、浅草の観音様にお詣りするには、まづ仁王門をくぐらねばならない。他家を訪問するにも、やはりその家の門をくぐらねばならぬ。門は、ある特定の場所に入るためには是非くぐらなければならぬものである。

信仰の場合も同じで、キリスト教では、天国に至る門は狭いといわれている。仏教でもまた「仏門に入る」といって、仏教の修行をするには「仏教の門」をくぐることをいっている。

選択集を開くと、その第一章に

「道綽禪師聖道、浄土の二門をたてて、しかも聖道をすて、まさしく浄土に帰するの文」

と書かれている。仏教の中に二つの門のあることが知られる。

一つしかないのならば、問題はない。誰も彼もみな平等に、それをくぐって中に入ればよいのである。ところが、二つあるとなると、そう簡単にはゆかなくなる。そのどちらかを選ばねばならない。

そうでなくとも、仏教には八万四千の法門といって、多くの教理教説の門がある。しかもそのどれ一つをとってみても、それぞれにすぐれた内容と深い意味がそなわっており、いずれとも判定を下しがたい。自分の能力をぬきにしてむづかしい教門に入ろうとしても、それは徒らに空しい努力といわざるを得ない。また、自分相応の低い法門を選べば、それだけにその到達する境地も低劣なものとなつて、自分の宗教的理想を満足させることが出来なくなる。

そこで、人々は迷うのである。一体、自分はどこへ行ったらよいのか。どの門をくぐったらよいのか。

こうした迷いに対して、古来多くの祖師達はそれぞれ自分の体験と所信をもととして、全仏教を体系づけているのである。たとえば天台宗では全仏教を四つの教えと五つの時期を立てて体系づけており、真言宗では、さとりに至る心理的段階を十に分けて、人間の宗教心理を整理している。そして、そのいづれもが、最もすぐれた、最もよい教門に人を導こうがために努力しているのである。天台ではお酒でいうならば、一番濃厚なトロリとした芳醇な味を持つ醍醐（だいご）にもくらべるべき、円熟完成した「法華経」の教えを最上のものとして、人々にすすめる。真言では、動物のような粗野な、荒々しい心から、段々に純化された微妙なはたらきをする第十の「秘密莊嚴心」に至ってさとりの境地に入ることが出来るのであると教える。

一番よいもの、一番すぐれたものをすすめてくれることはありがたいことである。しかし、それは買手のフトコロ具合を考えずに、高価なものを押しつける商人に似ている。「よい」ことはわかっているのだが、やはり買手にも色々と都合があるのだから、むやみに手を出すことは出来ない。選択集にはこのことについて、安樂集（道綽禪師

著）の文を引用して、次のように説明している。

「聖道（すぐれた道）は、今日ではこれを実際に體現することはむづかしい。何故なら、これを説かれた釈尊が亡ってから久しい時がたってしまったし、また、その理論が深遠で解釈が実に微妙であるからである。だから大集月藏經というお経には、仏法がすたりおとろえ、悪道のさかえる末の世になってはいくら多くの人々が仏道を修行しても、いまだ誰一人として仏になったものはないといっている」これでは、折角最上の教え、最良の道を示めしてくれても、それは、末世の人々にとっては無駄なものであり、人々は永久に救われないことになってしまう。こんな「門」に人を導くのは「売らんかな」の商業主義というほかはない。

二、二つの道

本当の商売というものは、買手の都合を考えて、金のない人には安くて、しかも少しでもよいものをすすめるべきである。現在はまさに末世末法であり、五濁惡世である。このような世に住む人間に、どうして「精神的金持」のいようはつはない。そうした人間をこそ、何としても救い上げようとするのが、本当の仏の道ではあるまいか。そう

してこそ、本当の仏者といはれるべきではあるまいか。

そこで宗祖ははっきりと

「たとえ聖道門を学んだ人でも、もし浄土門がよいと思つたら、すべからく聖道門をすてて浄土門に帰すべし……」
と云つて、買いたくても買えぬような高価な「聖道門」はやめて、自分に買うことの出来る「浄土門」を選べと教えられた。

それでは、なぜ浄土門を選ぶのかというと、それは繰りかえしていうように、いわば「精神的貧乏人」でも気兼ねなく「くぐれる」門だからである。気兼ねなくくぐれるというのはどういうことか。それはこの門に通ずる道が平々坦々とした安らかな道だからである。

このことについてしばらくみると

「このように、仏教を二つに分けることは、道綽禪師だけでなく、曇鸞、天台、迦才、慈恩などの方々も、やはりそうであった。ここには曇鸞大師の往生論註という本によつてみると、次のように書かれてある。

つつしんでみるに、竜樹菩薩の著書十住毘婆沙論には大意以下の如くに述べられている。修行して仏に成ろうと努力している菩薩が、不退転の位（くらい）に至ろうとするには、二つの道がある。一つには難行道、二つには易行道

である。難行道というのは、にがりけがれ、しかも釈尊も云つておいでにならぬ末法の世において、不退転の信仰を確立することは非常にむづかしいということである。その理由はいろいろあるが、五つほどあげてそのわけを明かにしてみると、

第一に、仏教を信じない人々がみせかけの善行をして仏道修行をしているものの善行をまぎらわしくする。

第二に、自分だけさよとればよいとする人々が、大勢の人を救おうとする人の修行をさまたげる。

第三に、悪い人間が他人のよいことをするのを邪魔する。

第四に、誤った考えでする行為が仏教の正しい修行をうちこわす。

第五に、自分の力だけをたよりにして、仏の偉大なる力を知らぬ。

こうしたことが、いまの世には限りなく行われているがこれは、丁度自分の足で山坂多い陸路を旅するように、苦しい道である。

易行道とは、ただみほとけをたより信じて、浄土に生れようとねがえば、みほとけが建てられた本願の力にのつてただちに往生することが出来るということ、たとえば、

船（ほとけの本願）にのって、楽しく旅をするようなものである。そして、この難行道というのは先にいった聖道門のことであり、易行道というのは浄土門のことである」

そこで、さきには「門」といって、特定の場所に入る入口についていったのを、いまはそこへ至るにはどのような「道」があるかということを説明したわけである。ところが私共人間には足弱わな、苦難に耐えがたい人もいれば、意志も強く、敢然として苦難に立ちむかって行ける強健な心の人々もいる。旅なれない、足弱わな人に、苦難の多い陸路を歩めといっても無理であり、途中でへたばってしまいうにちがいない。だから、出発点で、よく自分の力を考えてみて、無理のない、必らず目的地に到達出来る道を選ぶべきである。しかも、世の中の大部分の人は足弱わで、旅なれていないのである。いつの世においても、峻嶒の道を踏み行くことの出来る人はきわめてまれである。

宗祖が見られたのは、峻嶒な山道に行きなやんで、折角の「信仰の旅」を途中であきらめて、あらぬ方角にそれたり、道ばたにうづくまったりしている大勢の人々のあわれな姿であった。このような「智慧のまなこめしい行法の足なえたる」人々を、無事安穩に目的地に連れてゆくにはどうしたらよいか。これが宗祖畢生の念願だったの

である。人をして、その能力（機構）にふさわしい道をえらばせよ、ここに本当のすくい心の心が輝くのである。相手かまわずに、いたづらにむづかしい、困難な道を行かせることは、決して真の仏者のとるところではないのである。

三、門の骨組みと土台

易行の道に通ずる浄土の門とは、どのような「門」であるのか。丹青に彩られた華麗な門であるのか。あるいは木の目も鮮かな白木の門であるのか。堅牢にして莊重な石造りの門であるのか。その前にたたづんで、しばしその風姿をたのしむのも決して無駄であるまい。

われわれがくぐるべき「浄土の門」くわしくは「往生浄土門」とは、三つの經典と一つの論著から出来ているのである。いわば三つの經典と一つの論を骨組みとして組み立てられており、それに他の様々の經論が裝飾や屋根や軒まわりに用いられているのである。したがって、浄土の門の構造を知るには、この三經と一論をよく読むことが肝要である。

その第一の無量寿經は無量寿阿弥陀仏が、念仏の衆生を救いとうとして誓われた四十八の願いと、その仏の本願を信じ、とくに第十八番目の「もしわれ仏を得たらんに、

十方の衆生、至心に信樂（しんぎょう）して、わが国（浄土）に生ぜんと欲して乃至十念せんに、もし生ぜずば正覺をとらじ」という願いにしたがって、念仏をとなえ、みほとけの救いにあずかるべきことを説いたお経である。

第二の觀無量壽經というのは、ひじょうに劇的に構成されたお経である。マカダ国の王舎城に住む阿闍世という王子が、悪心を持つ提婆という出家にそそのかされて、父王と母のイダイケとを牢屋におしこめ、はてにはこれを殺してしまおうとするのであるが、月光という忠義な家臣にいさめられる。他方、イダイケは牢獄にとちこめられ、母として、また一人の女として、死を目前にした身の悲運と不幸をなげき、このようなわが子を生んだおのれの罪の深さにめざめ、釈尊の導きによって弥陀の極樂のあり様をありのままに思い浮べ、仏の名号を唱え、その本願に乗じて苦の境涯から救われて行くことを叙述したものである。このお経については、特に、善導大師が注釈を書かれており、それだけにこの経が浄土教にとって大切なものであることが知られる。

第三の阿弥陀經というのは、極樂の美しさ、楽しさを描き、現にその土において説法されている阿弥陀仏の氣高いお姿を手にとるように説き示めしたお経で、このお経をよ

むと、心の底から極樂浄土に生れたいという願いが湧きおこって来るようである。

次に一論とは天親菩薩の書かれた往生論のことである。天親菩薩というのはインドの人であるが、元来、インド時代の仏教ではアミダ仏の信仰はまだはっきりした形をととのえなかったのであって、天親菩薩ただ一人、弥陀信仰の上からこの本を書かれたので、この意味でこの論は大切なものとされ、曇鸞大師はわざわざこれの注釈書を執筆されているのである。往生論は主として安樂世界に往生するための五つの方法が説かれている。むろん、詮ずればそれは口称念仏につきるのであるが、弥陀本願の専修口称念仏のおしえが導き出されるための、もとの論拠がここに求められるのである。従って、これは浄土の門の土台、または礎石をなすものとして抜くことの出来ぬ大切なものとされているのである。

ところが、いくら大切であり、ありがたいとわかっていても、これだけのものを全部よんで、しかもこれを理解するということは、仲々に出来にくい。宗祖が選択集を書かれたのは、この疑問に応えるためだったのである。

「開けば三部經、たためば選択集、かなめは一枚起請文」という言葉が深く味合われるゆえんである。（文学博士）

あとがき

◇中山義秀先生は明治三十三年福島に生れ、早稲田英文科卒、中等教員を経て、昭和十三年芥川賞を受けられ、長い作家生活が続けておられます。「人生の真実」は先生の体験をそのまま綴られたものです。

◇椎尾弁匡先生は、お目が不自由にかかわらず、以前と少しも変らぬ御活躍ぶりです。ご健康の許すかぎり地方に出られることは、それだけ多くの人に先生に接する機会を与へることで、有難いことです。自叙伝として「水子と念仏」というお話は先生のご信念をのべられたに外なりません。

◇正力松太郎先生は、各方面でのご活躍ぶりは誰も知るところですが、第一に練えられたお身体がもとになっています。それに禅で修行され、ほんとに「身を捨てる信

念」をお持ちなればこそ、と感服致します。

◇新進学徒による「寺院と布教」座談会をお願いしました。所属宗派と専攻が違っていますが、何んとなく騒々しい現代にあつて、日常にお考えのことをお話し願ったわけです。従つて話題も豊富なわけ、いつつきるともなくお話がはずみました。そのため司会者の方が困つてしまいお話にブレーキをかけることで大汗をかいていました。誌面の関係でいろいろの話題をカットとさせていただきましたことをお詫びします。また編集部の水谷、佐藤両氏の写真を会員各位に紹介の意味でのせました。

◇竹中信常先生の選釈集私解は、いよいよ本論に入り、浄土門のもつ意味、阿彌陀さまについて等のことにふれて下さいました。難解の選釈集が先生の麗筆を通して会員各位の眼前に描き出されてきま

す。先生は相変らずご多忙で次々と席の暖まる暇もありませんが元気でご活躍になつています。

◇水口正宏氏は正大学院国文学に在学中ですが、児童研究部の中堅として働いています。

◇牧尾良海先生の中国綺談は、数多い中国の材料から選ぶにご苦労なさつています。心不可得の心はこころということと心藏という意味と両者を兼ねて意味するところに面白さがあります。心（心藏）はついに他人からは得られないとのこと、こう記すより外によい題名がみつかりませんでした。

◇吉野翠幹氏は、終戦後ソ連に抑留されていた方で、この割腹事件は事実をそのまま書いたものです。見渡す限り樹木一つなく、夏になれば草も枯れてしまうそうです。遊牧の人達が時おり平原を横切つてゆく外は何もない所だそうですかかる荒野での割腹でした。

「浄土」購読規定

一部 定価 金五十円

(送料 六円)

会費一力年 金六〇〇円

(送料 不要)

浄土 八月号

昭和十年五月廿日

第三種郵便物認可

昭和三十六年七月廿五日 印刷

昭和三十六年八月一日 発行

定価 五十円

編集人 村瀬 秀雄

発行人 佐藤 密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 新光社印刷株式会社

東京都千代田区飯田町二ノ八

発行所 法然上人顕仰会

電話東京三三二局五九四四番

振替東京八二一八七番

☆☆信仰の「泉」浄土トラクト☆☆

新刊 浄土トラクト

在家の方々の為の

村瀬秀雄著

浄土宗勤行の解説

新書版九〇頁
定価七〇〇円
送料二〇〇円

待望の書「浄土宗勤行式の解説」愈々刊行
旧版「浄土宗日常勤行式解説」を全面的に
改訂、版も持ち易い新書版として刊行

(百部以上五分引送料無料)

大正大学教授 佐藤良智著

真理のはなたば

新書七〇頁
定価七十円
送料二〇円

若き人びとにおくる仏教入門

青年会 婦人会に最適のテキスト

東京都千代田区飯田町二ノ八

申込先 法然上人鑽仰会

振替東京八二一八七番

日本一の生産・設備

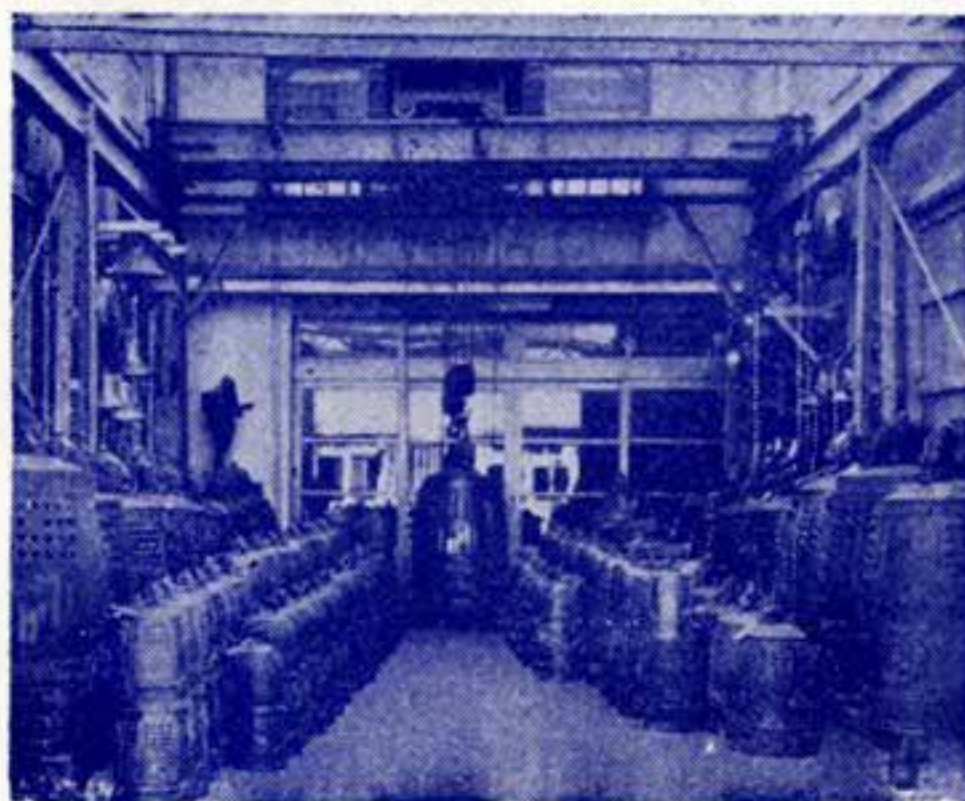
梵鐘 (45cm~85cm)

在庫豊富

喚鐘 (12cm~51cm)

音響物理学博士青木一郎先生

梵鐘界の権威 日展参事香取正彦先生
芸術院賞受賞



日本最初の黄綬褒賞

(昭和三十年四月廿七日)

鑄物師 老子次右衛門翁

大阪市北区曹根崎町一丁目

大阪ヨリ十五分(梅田新道大映横東へ一丁右側)

株式会社 老子製作所 大阪支店

電話大阪(34) 8847番 本社工場 高岡市横田